

お　ば　な　さ　か　う　え　い　せ　き  
**尾　花　坂　上　遺　跡**

一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業(鬼ヶ久保工区)に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

お　ば　な　さ　か　う　え　い　せ　き  
**尾　花　坂　上　遺　跡**

一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業(鬼ヶ久保工区)に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

宮崎県教育委員会では、既存県道や国道の改良事業、高速道路へのアクセス道路整備などに伴う発掘調査を実施しております。

今回報告する尾花坂上遺跡は、この県道改良に伴い発掘調査された遺跡です。調査では、縄文時代晩期の土器や弥生時代後期から終末期の土器が出土したほか、大変狭い面積から縄文時代早期の土器や石器、そして集石遺構が34基検出されました。特に集石遺構は県央清武町等で検出される深い掘込を有するタイプが見られ、県内の該期の集石遺構のあり方を解明する上で貴重な資料となることでしょう。

本書に収録された記録資料類が歴史研究の資料として広く活用され、当県の埋蔵文化財に対する関心と理解の一助となり、また、生涯学習及び学術研究の分野において役立つことを心から願うものであります。

なお、調査にあたって御協力いただいた地元の方々をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方ならびに関係諸機関の方々に深く感謝申し上げます。

平成17年2月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 宮園 淳一

## 例　言

- 1 本書は、一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業（鬼ヶ久保工区）に伴い、宮崎県教育委員会が実施した尾花坂上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県土木部高鍋土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成15年8月18日から平成15年12月25日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影などの記録は福田泰典、柳田晴子、古屋美樹が発掘作業員の協力を得て作成した。礎の分類については主に福田、堀田孝博、柳田が行った。空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに、自然科学分析は株式会社古環境研究所に、基準杭設置は有限会社川南技術コンサルタントに委託した。その他、発掘調査期間中に埋蔵文化財センター職員らに遺構実測の協力を得た。実測者は以下のとおりである。

南正覚雅士、嶋田史子、松元一浩、柳田裕三、黒木修

- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは柳田が整理作業員の協力を得て行った。石器実測は日高広人が主に担当した。
- 6 本書で使用した第1図「遺跡位置図」は国土地理院発行の5万分の1図「川南」「妻」「石河内」「高鍋」を、第2図「周辺地形図」は川南町役場発行の1万分の1図を基に作成した。
- 7 土層断面及び土器の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
- 8 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S C…土坑　　S I…集石遺構　　遺構実測図の縮尺は1/30で掲載している。
- 10 本書の執筆・編集は柳田が担当した。
- 11 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の記録	4
第1節 層序	4
第2節 調査の方法	5
第3節 遺跡の経過	5
第Ⅲ章 調査の記録	7
第1節 旧石器時代の遺物	7
第2節 縄文時代の遺構と遺物	7
第3節 弥生時代の遺構と遺物	25
第4節 まとめ	32
第Ⅳ章 自然科学分析の結果	34

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3	第14図 IV・V層出土遺物実測図（縄文土器）	18
第2図 遺跡周辺地形図	4	第15図 II層出土遺物実測図（縄文土器）	19
第3図 グリッド配置図	5	第16図 IV・V層出土遺物実測図（石器1）	22
第4図 土層柱状図	5	第17図 IV・V層出土遺物実測図（石器2）	23
第5図 石器実測図	7	第18図 石器石材分布図	24
第6図 S C I・2 実測図	7	第19図 縄文土器分布図	24
第7図 縄文時代遺構分布図	8	第20図 弥生時代遺構・遺物分布図	25
第8図 1類集石遺構実測図（1）	11	第21図 配石遺構実測図	26
第9図 1類集石遺構実測図（2）	12	第22図 S C 3 実測図	26
第10図 1類集石遺構実測図（3）	13	第23図 II層出土遺物実測図（弥生土器1）	28
第11図 2類集石遺構実測図	14	第24図 II層出土遺物実測図（弥生土器2）	29
第12図 2類・3類集石遺構実測図	15	第25図 II層出土遺物実測図（石器）	31
第13図 集石遺構出土遺物実測図	17	第26図 集石遺構出土遺物実測図	32

# 表 目 次

第1表 旧石器時代 石器観察表	7	第4表 II・IV層出土石器計測表	27
第2表 集石遺構一覧	16	第5表 弥生土器 遺物観察表	30
第3表 縄文土器 遺物観察表	21	第6表 構成砾の分類基準	32
		報告書抄録	目次裏

# 図 版 目 次

図版1 尾花坂上遺跡 全景（北より）／散礫 検出状況	37
図版2 S I 12 半截状況（南より）／S I 13 検出状況（南より）	38
図版3 S I 21 配石検出状況／炭化材検出状況／S I 26・27・28検出状況	.....
図版4 S I 16・17検出状況／S I 32・33・34検出状況／S I 8配石検出状況／S I 22花弁状配石 検出状況／III層上面配石遺構検出状況（南より）／S C 3検出状況（北より）	39
図版5 縄文土器（無文・貝殻条痕文系）／縄文土器（貝殻文系・押型文系・ヘラ状工具施文系）／縄文土器（晚期）／旧石器・縄文時代石器	40 41
図版6 縄文時代石器／弥生土器（66）／弥生土器（65、66、81、93、94）	42
図版7 弥生土器（壺）／弥生土器（壺）／弥生土器（高杯）／弥生時代石器	43

## 報告書抄録

ふりがな	おばなさかうえいせき					
書名	尾花坂上遺跡					
副書名	一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業（鬼ヶ久保工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第101集					
編集執筆担当	柳田晴子					
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019 番地 TEL 0985-36-1171					
発行年月日	2005年2月7日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在 地	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
おばなさかうえいせき 尾花坂上遺跡	みやざきけん 宮崎県 こゆべんかわあなんみらう 児湯郡川南町 おおあざかわあなんあざおばな 大字川南字尾花	32度9分44秒 付近	131度30分16秒 付近	2003.8.18 ～ 2003.12.25	380m <sup>2</sup>	一般県道高 鍋美々津線 地方道路交 付金事業 (鬼ヶ久保工区)
種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
散布地	旧石器時代		石核、スクレイパー			
集落跡	縄文時代早期・晚期	土塙 集石遺構	早期・晚期土器 石礫・石斧等各種石器	直径1m、深さ70cmの巨大集石遺構		
散布地	弥生時代後期～終末期	土塙 配石遺構	後期～終末期の弥生 土器、磨石、石斧	両脇に石を設置した土塙 焼石を渦巻き状に配置した 配石遺構		

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

県道高鍋美々津線鬼ヶ久保工区は、国道10号線から東九州自動車道高鍋インターチェンジへのアクセス道路として県道石河内高城高鍋線へ繋ぐため、宮崎県高鍋土木事務所が平成14年度からの施工計画を立てていたものである。県文化課では、当該路線が周知の遺跡である尾花B・勝司ヶ別府・湯牟田の3遺跡の近隣を通る計画であることから、高鍋土木事務所と協議調整を行った。その結果、平成14年に試掘調査を行う予定であったが用地買収等諸般の事情で実施できず、遺跡の存在が予想される約14,000m<sup>2</sup>については平成15年度に改めて調整することとなった。

平成15年4月中旬、県埋蔵文化財センターを交えた三者で再度協議を行った結果、ほぼ用地買収に目処が立ったこと、近隣の遺跡の状況から対象路線内に遺跡の存在が確実視されたことなどから、埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することになった。対象面積が13,700m<sup>2</sup>と広大であるため、はじめに遺跡の範囲を確定し、その後新たに本格的に発掘調査を実施するという2段階の調査を行うこととなった。

調査は平成15年8月18日に着手、8月末には台地の南端部約400m<sup>2</sup>を除いて殆ど削平を受けていることが判明し、新たに態勢を立て直して9月下旬から12月25日まで380m<sup>2</sup>、2層の文化層の発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の組織

尾花坂上遺跡の調査組織は次のとおりである。

### 発掘調査（平成15年度）

#### 宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大蘭 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主査	福田 泰典
同 主任主事	甲斐 貴充
同 係主事	柳田 晴子
同 調査員	古屋 美樹

### 整理作業及び報告書作成（平成16年度）

#### 宮崎県埋蔵文化財センター

所長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大蘭 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主事	柳田 晴子
（整理担当）	

## 第3節 位置と環境

尾花坂上遺跡は児湯郡川南町大字川南字尾花に所在する。川南町は日向灘に面した宮崎県中部にあり、上面木山（1,040m）から派生する山地及び丘陵面とその東麓から海岸にかけて広がる段丘面から成る。段丘面は一連の平坦面ではなく、崖によって区別され、青鹿面・茶臼原面・国光原面・唐瀬原面・川南原面等の計14面から構成される。本遺跡は平田川と小丸川支流の切原川に挟まれた高城面台地に位置する。

次に本遺跡の周辺の歴史環境について記述する。尾花坂上遺跡の周辺は川南町・高鍋町の詳細分布調査によると、旧石器時代～古墳時代の散布地が数多く確認されている。発掘調査が行われている分を以下説明する。

後期旧石器時代の遺跡は後牟田遺跡、藏庄村遺跡、高鍋町持田中尾遺跡、中尾・牛牧地区遺跡等が調査されている。持田中尾遺跡ではナイフ形石器、角錐状石器、搔器等が出土している。ナイフ形石器はホルンフェルスの横長剥片を素材としており瀬戸内技法との関連をうかがわせるものである。牛牧遺跡では遺構は集石遺構6基を検出しており、遺物はナイフ形石器、搔器が出土、石材は頁岩が大半を占めている。

縄文時代の遺跡は前述の後牟田遺跡、藏庄村遺跡、中尾・牛牧地区遺跡の他に上ノ原遺跡、高鍋町大戸ノ口第2遺跡、野首第1遺跡等がある。上ノ原遺跡からは集石遺構14基、配石遺構2基を検出しており、遺物は早期の貝殻条痕文系土器、押型文土器（楕円・山形）、中でも楕円押型文を施した尖底・平底の底部等県内では稀少な土器が出土している。大戸ノ口第2遺跡では早期の集石遺構45基が確認されており、遺物は押型文土器、石鏃、石錐等である。尾花坂上遺跡は小丸川を挟んで対岸の遺跡とその出土遺物・遺構の内容が似ている印象を受ける。

弥生時代の遺跡は前期末の遺物が出土している持田中尾遺跡、後期後半～終末期に相当する弥生土器が出土し、円形と方形の各1基の周溝墓が確認された東平下遺跡、弥生時代後期の堅穴住居跡6軒が確認された上ノ原遺跡等がある。

古墳時代の遺跡は本遺跡の北西に川南古墳群、南東に持田古墳群が存在する。小丸川右岸には牛牧古墳群・山王古墳群・老瀬横穴墓群、野首古墳群などがある。

この他にも近年、遺跡の周辺は東九州自動車道関連で本遺跡に隣接する複数の遺跡が調査され、これまでわからなかった小丸川周辺の様相が明らかになりつつある。平成15年度時点でのその概要を記述する。

湯牟田遺跡（二次調査）は弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡、中世の土坑、小穴群等が検出されている。弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居跡は方形プランを呈し、焼失住居が1軒確認されている。川南古墳群の北東約1kmに位置しており、この集落の性格が注目される。

小丸川の右岸に形成された舌状台地上に位置する野首第2遺跡は、後期旧石器時代、縄文時代早期・後期・晚期、古墳時代中期、古代～中世にわたる遺跡である。縄文時代早期の100基近い炉穴・集石遺構や、縄文時代後期の堅穴住居跡群の他、古代の縁軸陶器・布目瓦等遺構・遺物ともに大規模である。今後これらの調査遺跡との比較・検討が必要である。

#### ＜参考・引用文献＞

川南町「川南町史」1983

高鍋町教育委員会「中尾・牛牧地区発掘調査報告書」高鍋町文化財調査報告書 第7集 1995

高鍋町教育委員会「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」1982

宮崎県史刊行会「宮崎県史」資料編 考古1 1989

高鍋町史編さん委員会「高鍋町史」1987

川南町教育委員会「川南町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書 1983

宮崎県埋蔵文化財センター「東九州自動車道（都農～西都原）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV」2004

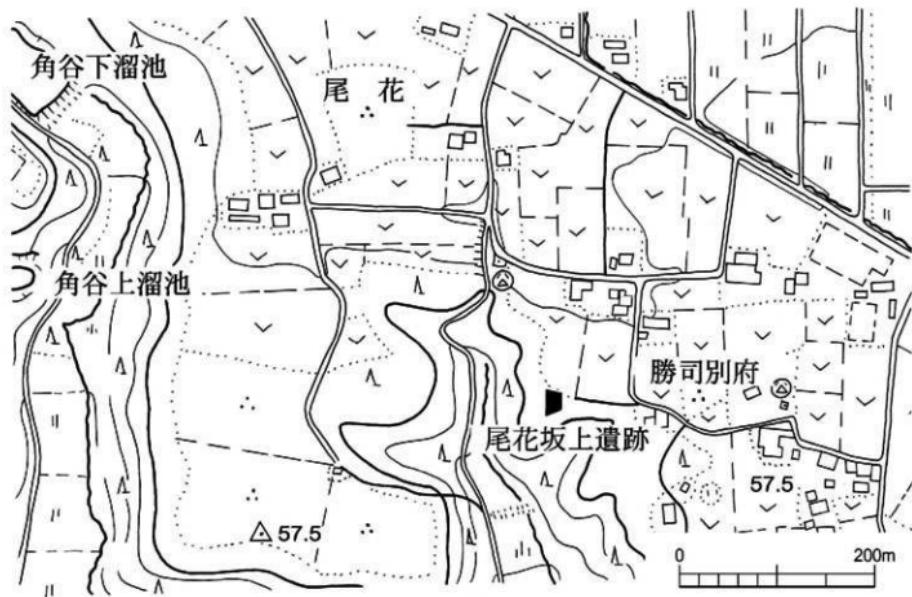
高鍋町教育委員会「大戸ノ口第2遺跡」高鍋町文化財調査報告書 1991

高鍋町教育委員会「高鍋町遺跡詳細分布調査報告書」高鍋町文化財調査報告書1991



- 1. 尾花坂上遺跡 2. 後牟田遺跡 3. 野稲尾遺跡 4. 尾花B遺跡 5. 持田中尾遺跡
- 6. 北牛牧第1遺跡 7. 上ノ原遺跡 8. 大戸ノ口第2遺跡 9. 野首第1遺跡 10. 天神前遺跡
- 11. 羽音田遺跡 12. 中ノ迫A遺跡 13. 尾花塚古墳 14. 川南古墳群 15. 持田古墳群 16. 牛牧古墳群  
<東九州自動車道関連遺跡>
- 17. 尾花A遺跡 18. 湯牟田遺跡 19. 国光原遺跡 20. 赤坂遺跡
- 21. 前ノ田村上第1遺跡 22. 崩戸遺跡 23. 野首第2遺跡 24. 老瀬坂上遺跡 25. 下耳切遺跡

第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1 : 5,000)

## 第II章 調査の概要

### 第1節 層序 (第3図、第4図)

尾花坂上遺跡は、谷に向かって南西方向のゆるやかな傾斜がみられる (第2図、第7図参照)。そのため包含層も南西方向に傾斜し堆積している。その堆積状況を確認するため調査区北壁と西壁で土層観察を行った。なおテフラ等に関する理化学的な分析は行っていない。以下説明を行う。

第I層 (黒色土) 表土で、現耕作土。

第II層 (黒褐色土) クロボク土で、縄文時代晚期及び弥生時代終末期の遺物包含層である。

第III層 (黄橙褐色土) アカホヤ火山灰層である。谷に向かってその堆積が薄くなっている、途中から消失する。①でみられる堆積も均一ではなく、風雨による流出の可能性が高い。

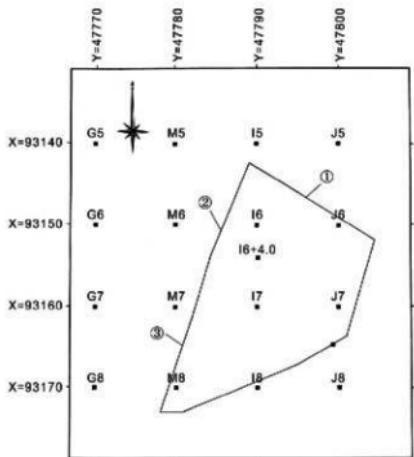
第IV層 (黒褐色土) しまりの良い黒褐色ローム層。調査区の北側 (①、②) では確認できるが南西側 (③) ではみられない。北側ではこの層から散礫・集石遺構を検出、遺物は縄文時代早期の土器・石器が出土した。

第V層 (黄灰褐色土) IV層より粘性はあるが、しまりはない。この上面で調査区南側は散礫・集石遺構を検出、下面からはSC1・2を検出している。遺物は旧石器、縄文時代早期の土器・石器が出土している。

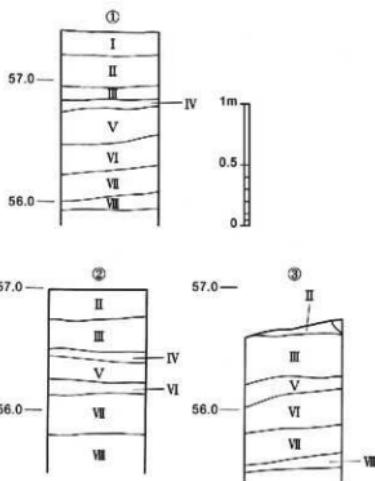
第VI層 (黄褐色土) しまりはあるが粘性はない。姶良丹沢火山灰 (A-T) を含む層だと考えられる。

第VII層 (暗褐色土) しまりのないバサついた土。遺物・遺構は検出されなかった。

第VIII層 (橙褐色土) アワオコシを主体としており、しまりの良い硬質の層である。



第3図 グリッド配置図 ( $S = 1 : 600$ )



第4図 土層柱状図 ( $S = 1 : 90$ )

## 第2節 調査の方法

当初、約13,700m<sup>2</sup>の調査区全体をA区、B区、C区、D区と設定し、各区ともトレンチによる遺構等の確認を行った結果、A区以外は遺構・遺物ともに確認できなかった。そのため9月以降の調査は、A区（以下調査区）に限定して行い、9月以降は調査区区分は用いず、旧A区を調査区としている。

グリッド杭は、国土座標系を利用し、10m間隔で設定した。ただし作業の効率化のため杭I 6から4m南の位置に補助杭を1本打っている。遺構は半蔵し、埋土の堆積状況を確認したうえで掘り上げた。遺構埋土中の遺物は床面付近の遺物以外は遺構一括として取り上げた。また、包含層中の遺物は平板測量もしくは包含層一括で取り上げた。主要な遺構の実測は縮尺10分の1で記録した。調査区全体の等高線図作成は縮尺100分の1で平板測量により行った。写真記録は6×6版モノクロ・カラー、35mmモノクロ・リバーサル・カラー写真を併用した。また、遺跡の空中写真については業者に委託して行った。

## 第3節 調査の経過

調査は平成15年8月18日から開始した。前述のとおりA区～D区の各区でそれぞれトレンチによる遺構等の確認を行った結果、A区以外は遺構・遺物ともに確認できなかった。そのため9月以降の調査は、A区に限定して行った。A区では試掘時にトレンチを設定したが、その6本のうちTA 3からは石器、繩文土器、弥生土器等が出土している。またTA 1・3・6の3か所から散縄がIV・V層付近より検出された。

8月29日に全面調査の決定したA区（以下調査区）の表土剥ぎを行い、弥生時代の包含層であるII層上面まで除去し、一旦調査を中断した。9月26～30日に事務所設置等準備を行い、10月1日より発掘調査を再開した。

まず遺物包含層であるⅡ層を人力で掘り下げていき、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。最初に配石遺構を調査区北西側で検出、そして調査区の西側で住居跡らしき黒褐色のニジミが検出された。サブトレンチを入れ確認を行った結果、遺構と思われる立ち上がりが壁際の1基のみ確認できたので全面掘り下げを行った。しかし樹根による搅乱が激しく、貼床等住居跡を示す痕跡は確認出来なかった。範囲を画面で押さえ、写真撮影を行った。その後、調査区の等高線図作成（標高56.6m～57.2m）、平板測量による遺物取上げを行い、この面の調査を終了した。

10月22日からⅢ層を重機により除去し、IV・V層上面まで掘り下げた。人力による精査を行った結果、散礫は調査区南側の一部を除いて全面に検出された。空撮を行った後、散礫の範囲を図化した。

散礫を外し始め、集石遺構と遺物の検出を行った。11月17日の時点で集石遺構が39基検出された（検討の結果、最終的には34基となる）。そのため、当初11月28日に調査終了予定だったが、土木事務所との協議の結果、12月25日までの約1か月間、調査を延長することになった。また11月27日よりバルーンライト（照明器具）を貸借し、夕刻の実測作業時間の確保に努めた。

12月3日に散礫のない調査区中央北側と中央南側にトレンチを設定し、VI層上面まで下げ、炉穴等遺構の有無を確認したところ、南側のトレンチでSC1・2を検出した。また、この時点でSI2、3、5～7、13～15、18～20、23～25の14基の集石遺構の図化記録作業を終了した。

12月15日には調査区東側の集石遺構実測・写真撮影を終了した。ほぼ全面VI層上面まで掘り下げ、炉穴等遺構の確認を行ったが検出されなかった。その後旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するためⅢ層上面まで全面掘り下げたが、検出できなかった。

この間にSI21の配石上面で大きめの炭化材が検出された。炭化材の剥落防止のため、バラロイドB-72を炭化材に塗布しながら検出作業を進め、最終的には土ごと取り上げた。



実測作業風景



SI21 挖り下げ作業

12月19日には調査区西側に向けてVI層までの掘り下げを進めていった。この時点でSI12、21、25、33以外の集石遺構の図化記録作業は終了した。調査区東西側、南北側の土層断面図作成を行い、平板測量による遺物取り上げも終了した。

最後にSI21の配石・掘込の写真撮影・実測作業、調査終了後に向けた安全対策を行い、平成15年12月25日に現地での調査を終了した。

## 第III章 調査の記録

### 第1節 旧石器時代の遺物

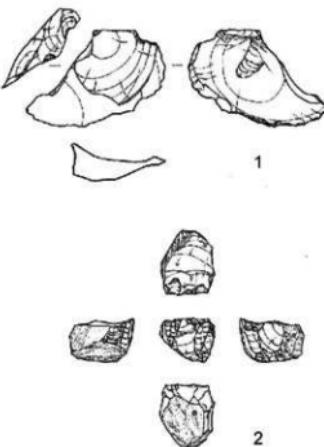
礫群等旧石器時代の遺構は検出されなかったが、遺物は2点出土している（出土位置・標高は第19図参照）。

1は二次加工剥片である。幅広い部分の下部を加工している。石材は流紋岩である。

2は細石核である。石材は黒曜石で、分割礫を素材とし、素材の分割面を打面としている。側面調整をおこなうタイプである。

番号	出土層・遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	V	二端刃片	流紋岩	6.0	8.5	2.25	64.2
2	V	石核	黒曜石	0.9	1.3	0.8	4.1

第1表 旧石器時代石器計測表



第5図 石器実測図  
(1はS=1:3、2はS=2:3)

### 第2節 繩文時代の遺構と遺物

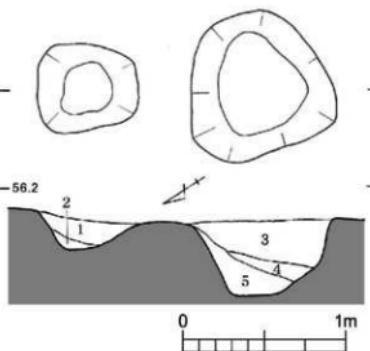
縄文時代の遺物・遺構はII層（晩期遺物）、IV・V層（早期遺物、散礫、集石遺構）で検出した。III層を除去し、IV層上面まで下げ縄文早期の遺構検出を行なった。調査区北側、北東側ではIV層である黒褐色土層が確認されたが、南西側では確認できず、黄褐色のV層上面が確認された。調査区全体から礫が全面に検出された。今回の調査では広範囲に散らばった礫を「散礫」とした。そしてこの散礫を除去した下から礫が密に集まっているのが確認できたものを「集石遺構」とした。この結果、散礫は2群、集石遺構は34基確認できた。散礫はIV層が確認された北東側に1群、V層の確認された南西側に1群みられる。さらにその集石遺構の下から土塙が2基検出されている。

#### 1 遺構

##### (1) 土塙 (SC) V層上面より検出。

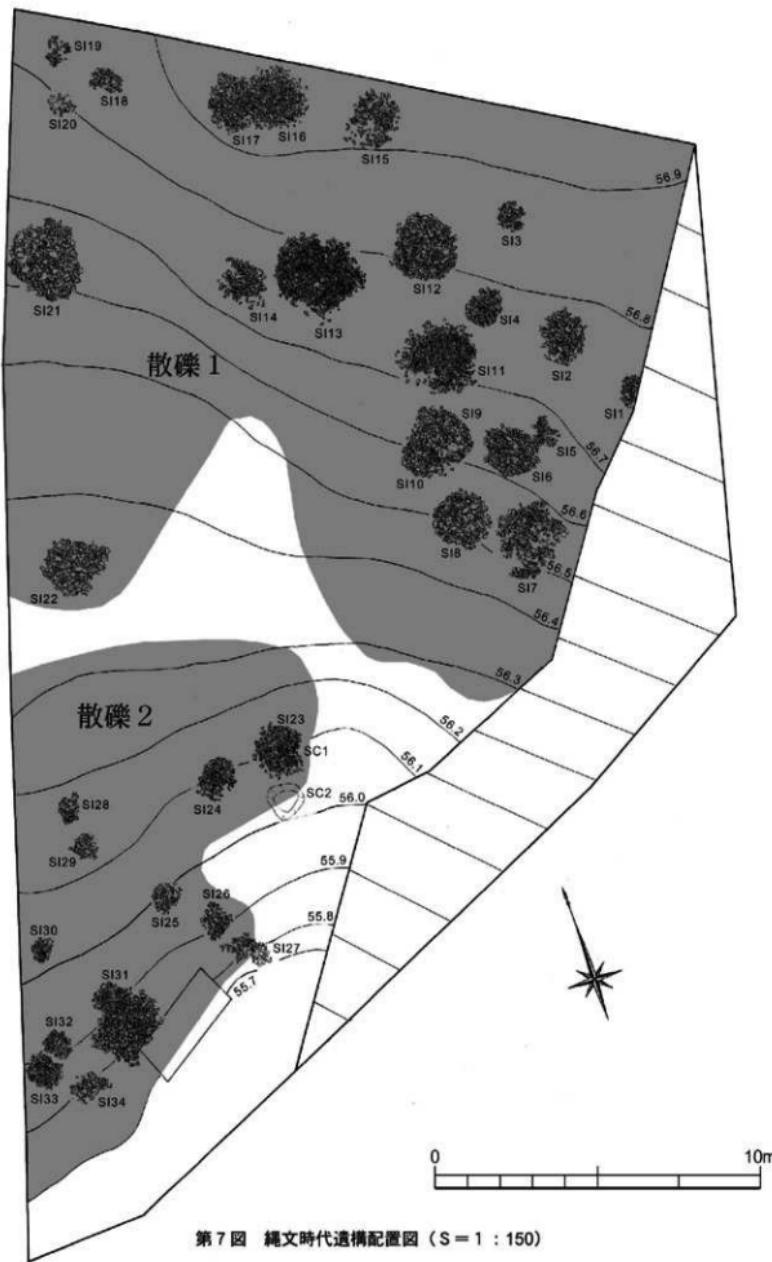
##### SC 1・2 (第6、7図)

S I 23の下10cmで検出された。2基が南北方向に並んで検出されたため当初は炉穴かと思われたが、2基の間に連結した箇所は見られず、焼土も確認できなかつたためその可能性は低い。遺物もなく、用途不明である。



第6図 SC 1・2実測図 (S=1:30)

- 1 暗褐色 (7.5YR4/4) 粗砂。弱い粘性を帯び、10mm以下のBLをわずかに含む。
- 2 暗褐色 (7.5YR4/3) 1と同組成。弱い粘性を帯びる。1よりやや暗い色調。
- 3 暗褐色 (7.5YR4/6) 黄褐色の斑文が認められるが不鮮明。粗砂。
- 4 暗褐色 (7.5YR4/6) 3と類似するが、やや粘性を帯びる。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土。焼土と思われる赤化した石を含むが炭化物は皆無。



第7図 縄文時代遺構配置図 (S = 1 : 150)

(2) 散礫 2群に分かれる散礫が検出された(第7図)。

散礫1(第7図)

調査区北西側付近の一群である。V層上面(黒褐色上面)より検出された。礫の分布密度は一様でなく、非常に密集している部分と散漫な部分が確認できた。S I 1~22が下から検出された。構成している礫は砂岩が大半で、円礫が削れた状態のものが多く、赤変している略が多かった。中には非常に高い熱を受け、石英等の成分が溶け、石の表面がガラス化している礫もみられた。その範囲は耕作等で削平されていた東側、調査区外の西側にも広がると思われる。

散礫2(第7図)

調査区南西側の一群である。V層上面より検出された。略の分布は平面的に一様であり、礫群1とは異なる分布を示す。その下からはS I 23~34が検出された。分布域はさらに調査区外西側に広がると思われる。

(3) 集石遺構を検出、長軸が1mを超えるものが16基と全体の約半数みられた(第7図、第8~12図)。

集石遺構をここでは大きく3つに分類し、掲載した。

1類 堀込、底石(配石)をもつもの

2類 堀込はあるが底石(配石)をもたないもの

3類 堀込をもたないもの

遺構の分布は、1類は散礫1の分布域(調査区北側)にのみ分布するなど、その形式によって分布域が分かれるようである。散礫2は2類と3類のみの分布だが大半は2類が占めている。全体に3類は少ない。これは3類の定義である「堀込をもたない集石遺構」の判別の難しさにあると思われる。散礫が調査区全体に分布している状況だったので、散礫下の集石遺構の検出を行なう際は周囲の掘り込みをもつ確実な集石遺構の検出面を基準に散礫を除去していく、という方法で行なった。その過程で判別がつかず消失してしまったものがある可能性も否定できない。また、集石遺構に使用されている石材だが、どの集石遺構も砂岩が全体の8割以上を占める(第2表)。砂岩以外の石材は尾鈴酸性岩、凝灰岩、ホルンフェルス等がみられる。

以下、各分類ごとにその特色等を記述する。

1類(第8、9、10図)

S I 1、2、6、8、10、12、17、21、22が該当する。

特徴：長軸1mを超す規模を持ち、堀込は20cmを超える深さである。礫密度が中～高と高く、埋土中に炭化物がみられる。そして配石は、下場の範囲に円礫を敷き詰めるよう配置されている。

S I 1(第8図)は削平により全体の約1/2が消失していたため、礫の上面と堀込の上場が確認できなかった。本遺跡の1類は大半が1mを超えることからこの集石の上場も1m超の大きさが想定される。配石の下に小礫を置き、配石の高さを一定にしている。堀込の断面は、立ち上がりが急なすり鉢状の形態を成す。

S I 6 (第8図)は東側にあるS I 5と重なって出土している。前後関係は不明である。  
S I 8 (第8図)は円礫を二つに割り、配石の両脇に配置している。配石に使用する礫の大きさを均一にするための可能性がある。S I 10 (第9図)はS I 9と切りあっているが前後関係は不明である。  
S I 17 (第9図)もS I 16と切りあっているが、掘込の断面観察よりS I 17がI6を切っていることが判明した。

S I 21 (第10図)は長径2.0mを超す大型集石遺構である。上場より30~50cm下辺りの掘込周壁に大きさ20cmの円礫が並べて配置してあった。熱効率を上げるために、壁にも石を配置していたと思われる。56.4mあたりから出土する礫は赤化したものが多く、その種類は10~30cmの円礫が大半を占めている。配石の上面より炭化材が検出された。材の方向から井桁状に組まれていた可能性がある。これらの資料の年代測定・樹種同定を業者に委託した。その結果、AMS年代測定法で1地点→8130±40年B P、2地点→8210±40年B Pという年代が計測された。樹種同定は計3資料分行ったが(1~4地点)、全てコナラ属コナラ節であると判明した(詳細は本報告書第IV章参照)。また、掘込底辺より5~10cmあたりに堆積していた土壌を探取し、ウォーターフローテーション法による検出を試みたところ、炭化材片の他、トウダイグサ科アカメガシワの種子と思われる炭化種子(完形)が出土した。ただしこの種子に関しては年代測定等は行わなかったので遺構の年代と合致するかは不明である。

## 2類(第9、11、12図)

S I 3、7、11、13、16、18、19、24、25、28~33が該当する。

掘込の規模の大きさ・深さから3つに分けることができる。

2-1類 掘込の長軸が1mを超すもの。その深さは20cm以下である。礫密度は高い。

(S I 7、11、13、16、31)

2-2類 掘込の長軸が1m以下のもの。その深さは約20cmである。礫密度は一定せず。

(S I 24、32、33)

2-3類 掘込の長軸が1m以下のもの。その深さは20cm以下である。礫密度は低い。

(S I 3、18、19、25、28~30)

### 2-1類

S I 7 (第11図)は南側の上面の礫は樹根によるカクランのため消失している。掘り込みも北側のみの検出である。S I 11・13 (第11図)は5~10cmの小礫が主体であり、密に入っている。掘り込みは非常に浅く、15cm程度である。長軸が約2mとその規模は大きい。S I 11は炭化粒が埋土中にみられるが、S I 13にはみられなかった。

S I 31 (第11図)は試掘トレンチにより一部を消失している。

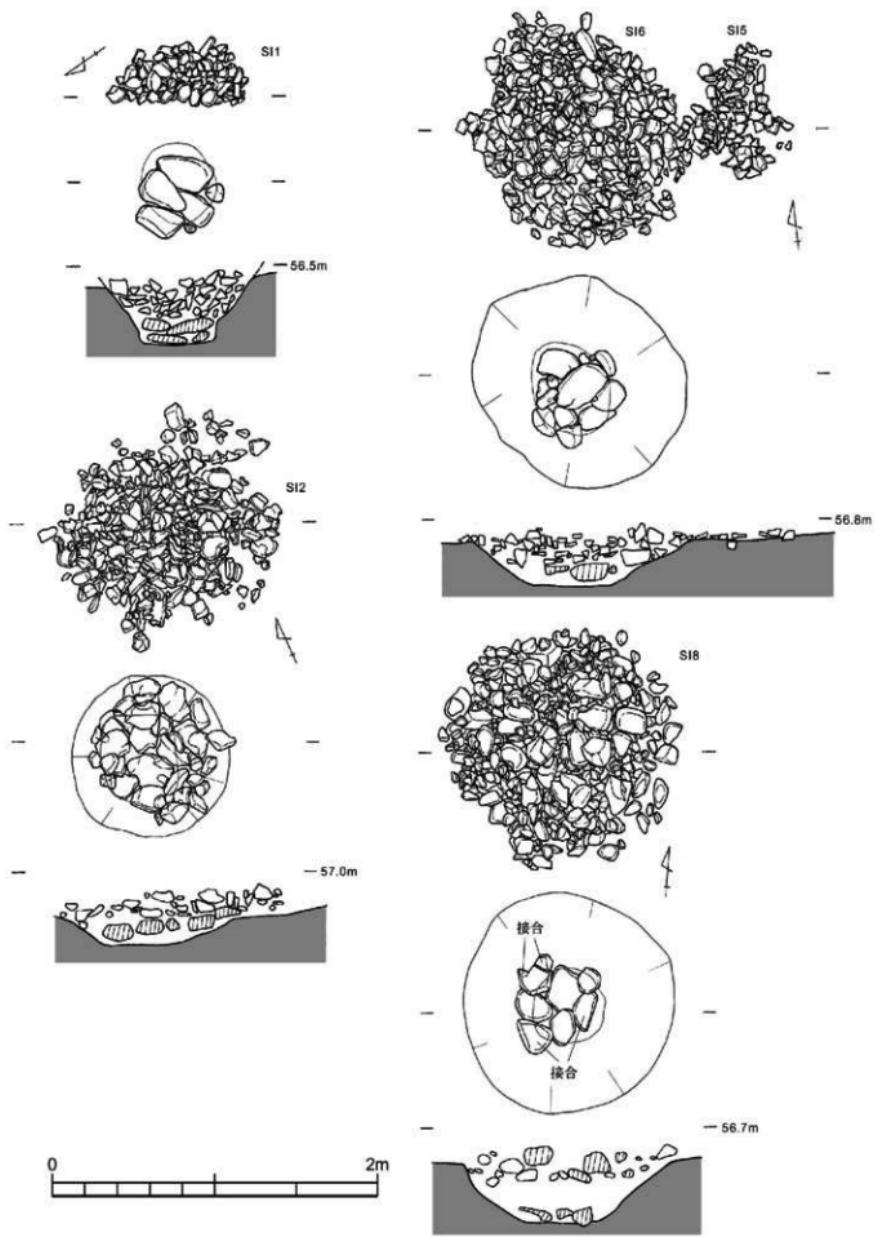
### 2-2類

S I 32 (第10図)は北側を一部消失している。上面より10cm下付近から埋土が黒くなり、炭化物を含んでいる。

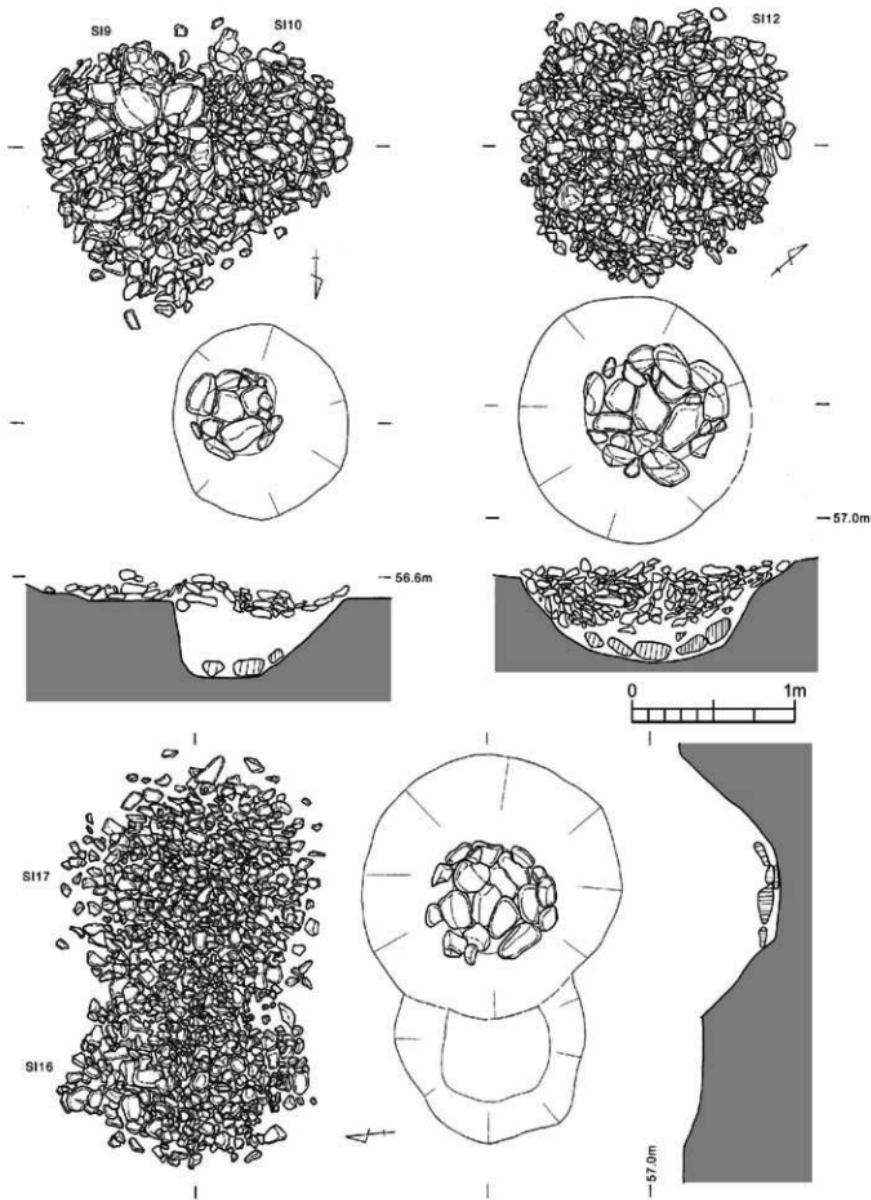
### 2-3類

S I 25 (第12図)は埋土中に炭化粒、1cm以下の礫片粒子が多くみられる。

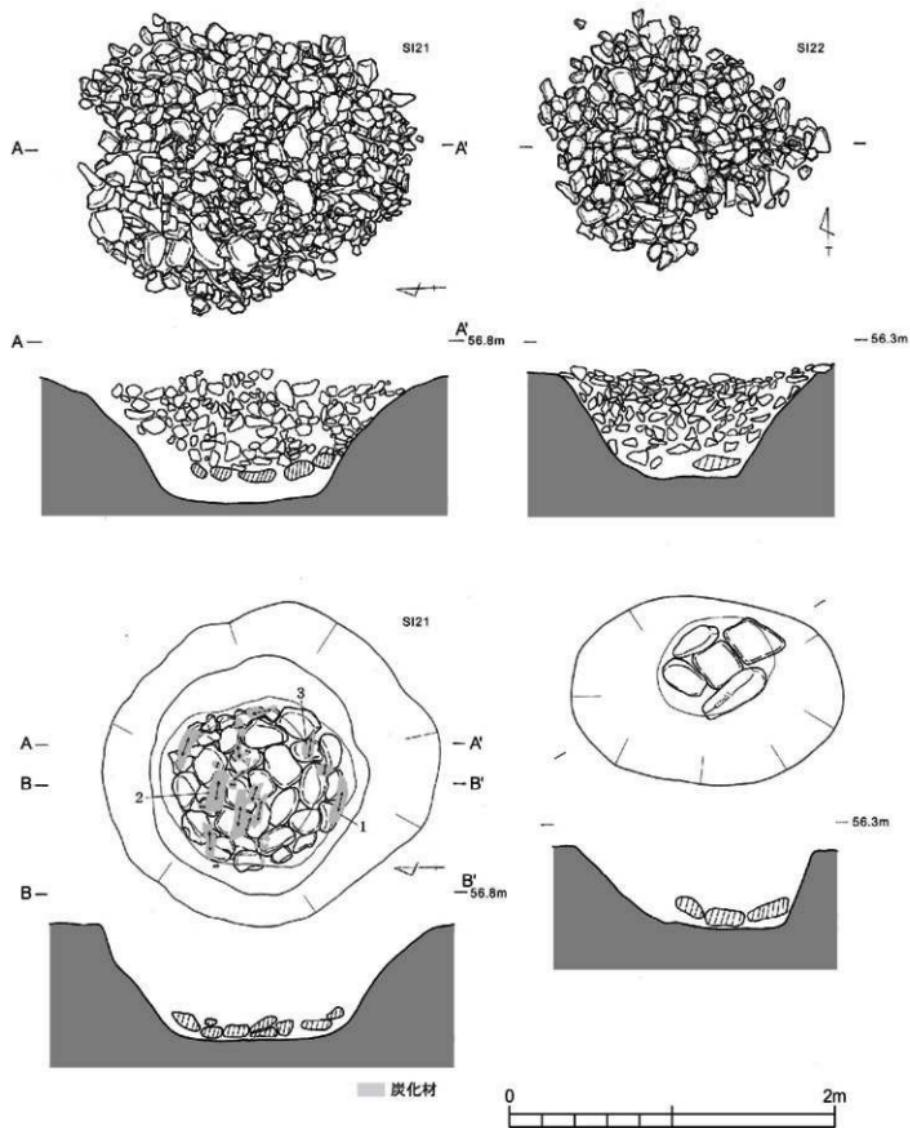
S I 28、29 (第12図)は炭化粒がわずかにみられる。礫は殆ど赤化しているものが大半を占める。



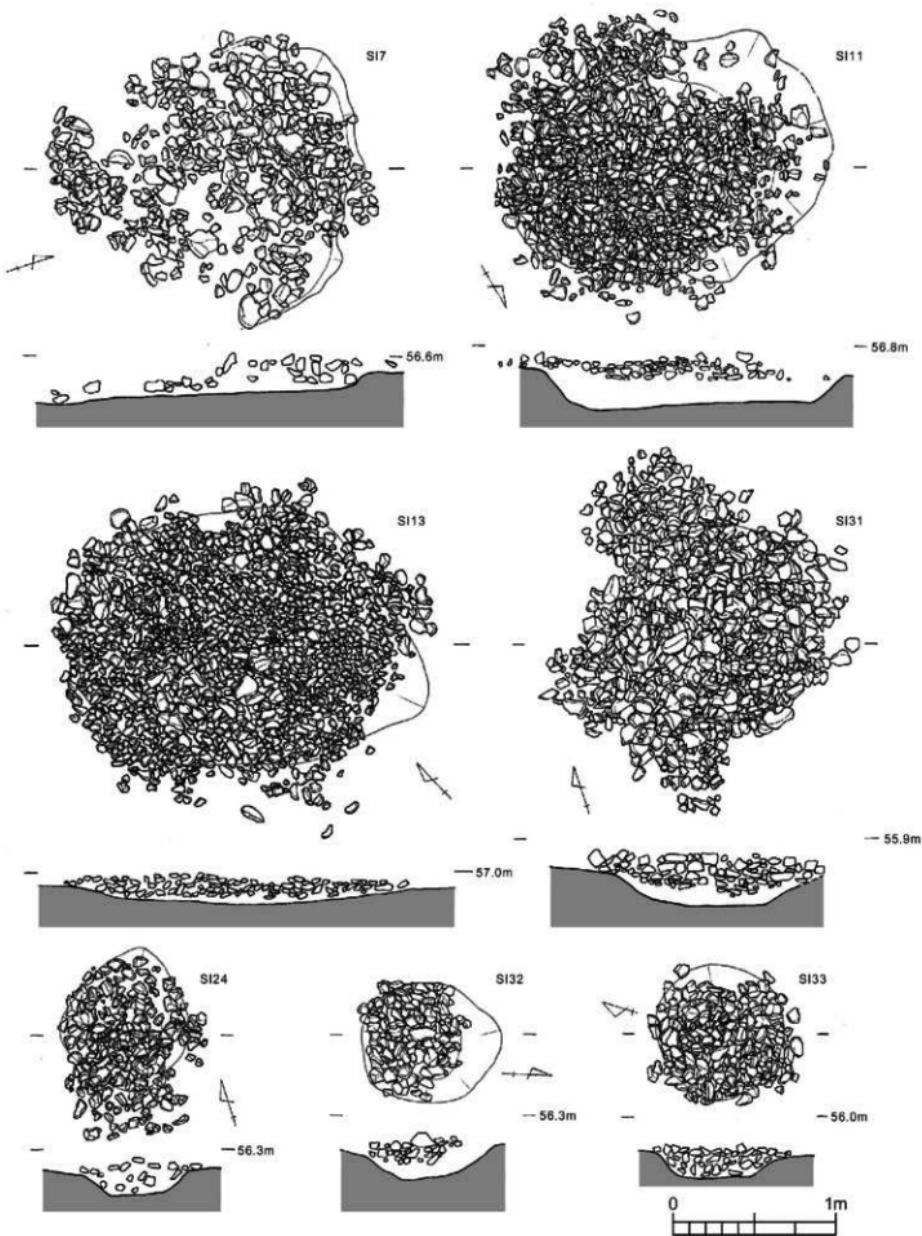
第8図 1類集石造構実測図(1) (S=1:30)



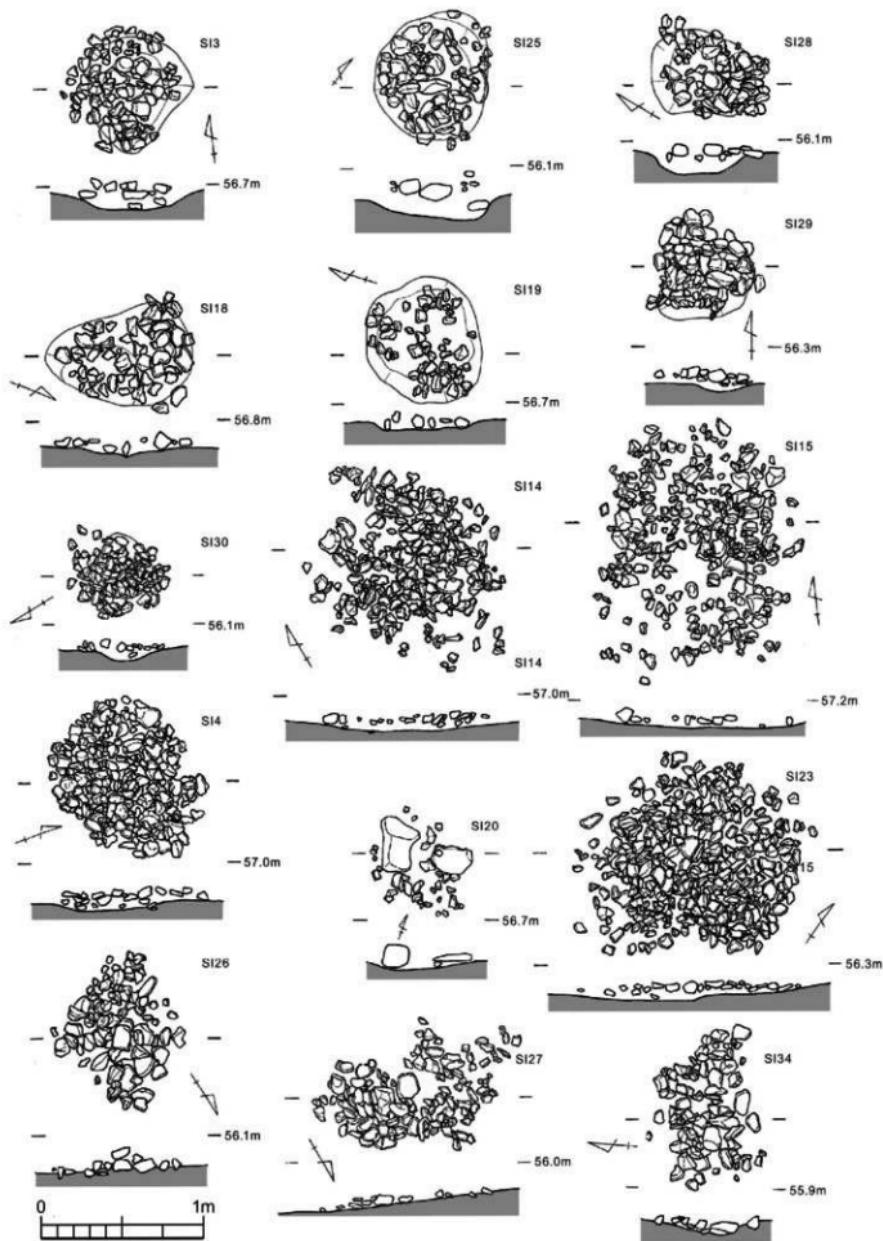
第9図 1類集石造構実測図 (2) ( $S = 1 : 30$ )



第10図 1類集石遺構実測図（3）（S=1:30）



第11図 2類集石遺構実測図 ( $S = 1 : 30$ )



第12図 2類・3類集石遺構実測図 ( $S = 1 : 30$ )

第2表 集石遺構一覧

遺構番号	分類	構成種数				石材						集石の長軸／短軸	埋込上場の長軸／短軸	埋込下場の長軸／短軸／深さ	埋込	配石	炭化物	礫密度 低・中・高		
		円錐	正円錐	亜角錐	角錐	総数	尾鉢	基岩	ネルン	砂岩	その他									
S I 01	1	7	29	78	16	132	11	8	6	107	-	-	0.5/0.4(0.4)	○	○	○	○	中		
S I 02	1	19	108	191	49	367	7	21	13	326	-	1.36/1.2	0.97/0.97	0.55/0.46/0.16	○	○	○	○	中	
S I 03	2-3	6	18	39	26	91	11	5	2	73	-	0.75/0.65	0.7/0.65	0.5/0.4/0.1	○	-	○	○	低	
S I 04	3	2	29	143	108	282	3	13	7	259	-	0.9/0.9	-	-	-	-	○	○	中	
S I 05	3	0	9	37	41	87	2	0	0	85	-	0.8/0.4	-	-	-	-	-	○	低	
S I 06	1	4	81	351	67	503	13	11	4	471	4	流紋岩3 頁岩1	1.3×1.2	1.38/1.16	0.58/0.45/0.3	○	○	○	○	高
S I 07	2-1	8	144	98	64	314	5	5	8	296	-	1.9/1.7	1.5/不明	/ /0.05	○	-	○	○	低	
S I 08	1	58	189	212	397	856	21	18	11	806	-	1.65/1.5	1.35/1.3	0.5/0.4/0.38	○	○	○	○	高	
S I 09	3	12	161	202	58	433	17	8	2	406	-	1.6/0.8	-	-	-	-	○	○	中	
S I 10	1	39	218	202	509	968	19	24	8	914	3	頁岩3	1.1/1.2	1.2/1.06	0.6/0.65/0.45	○	○	○	○	高
S I 11	2-1	21	198	473	321	1013	83	79	17	819	15	流紋岩8 頁岩7	1.8/1.6	1.84/1.44	1.38/1.02/0.24	-	-	○	○	高
S I 12	1	48	337	504	239	1128	19	21	12	1076	-	1.65/1.6	1.7/1.5	0.85/0.68/0.54	○	○	○	○	中	
S I 13	2-1	122	983	724	592	2421	118	129	38	2119	17	-	2.28/1.75	2.18/1.56	1.39/1.07/0.09	○	-	-	○	高
S I 14	3	18	37	78	149	282	27	18	2	235	-	0.95/0.9	-	-	-	-	○	○	高	
S I 15	3	21	54	102	97	274	13	21	7	233	-	1.45/1.0	-	-	-	-	-	○	中	
S I 16	2-1	81	191	321	256	849	19	11	23	794	2	頁岩2	1.5/1.0	1.83/1.8	0.66/0.5/0.6	○	-	○	○	高
S I 17	1	49	263	198	118	629	28	17	11	572	-	1.5/1.3	(1.1)/1.2	(0.7)/0.85/0.13	○	○	○	○	高	
S I 18	2-3	2	16	42	21	81	3	0	0	78	-	0.8/0.5	0.9/0.55	0.37/0.5/0.05	○	-	-	○	低	
S I 19	2-3	0	3	34	19	56	4	3	1	48	-	0.6/0.5	0.78/0.7	0.55/0.55/0.07	○	-	-	○	低	
S I 20	3	0	2	19	16	37	2	2	2	31	-	0.65/0.5	-	-	-	-	-	○	低	
S I 21	1	114	455	961	897	2427	161	187	19	2054	6	頁岩6	2.0/1.7	2.08/1.96	0.95/0.9/0.73	○	○	○	○	高
S I 22	1	83	207	386	115	791	48	33	9	698	3	チャート1 頁岩2	1.75/1.5	1.6/1.15	0.65/0.6/0.47	○	○	○	○	高
S I 23	3	3	88	149	38	278	2	3	0	273	-	1.3/1.09	-	-	-	-	-	○	低	
S I 24	2-2	7	61	184	51	303	8	11	2	282	-	1.05/0.8	0.85/0.78	0.37/0.25/0.15	-	-	○	○	低	
S I 25	2-3	5	63	12	19	99	0	3	0	96	-	0.65/0.7	0.78/0.78	0.45/0.4	-	-	○	○	低	
S I 26	3	1	28	35	19	83	2	1	0	78	2	頁岩2	0.9/0.8	-	-	-	-	○	○	低
S I 27	3	5	59	17	8	89	0	3	1	85	-	1.1/0.5	-	-	-	-	○	○	低	
S I 28	2-3	9	24	29	12	74	1	0	3	70	-	0.6/0.5	0.6/0.5	0.32/0.29/0.1	○	-	○	○	低	
S I 29	2-3	3	51	15	17	86	4	0	0	82	-	0.6/0.55	0.5/0.45	0.2/0.3/0.05	○	-	○	○	中	
S I 30	2-3	1	25	21	42	89	7	3	0	79	-	0.55/0.45	0.4/0.35	0.17/0.17/0.05	○	-	○	○	低	
S I 31	2-1	61	331	481	439	1312	81	27	16	1188	-	2.2/1.5	1.2/1.1	0.86/0.67/0.25	○	-	○	○	高	
S I 32	2-2	18	93	58	64	233	19	11	2	201	-	0.6/0.55	0.85/0.7	0.4/0.3/0.18	○	-	○	○	中	
S I 33	2-2	21	64	143	19	247	8	2	3	234	-	0.9/0.7	0.85/0.8	0.45/0.45	○	-	○	○	高	
S I 34	3	7	21	18	59	105	2	7	0	96	-	0.9/0.5	-	-	-	-	-	○	低	

注) 表中網かけで示したS I 5、S I 6・S I 7、S I 9・S I 10、S I 16・S I 17は切り合い関係にあり、構成種数は相対的に捉えたものである。

礫密度の高・中・低の基準は高-平面・断面ともに間になく難がみられるもの、中-高よりやや難が見られるが底ほど近ではないもの、低-難同士に難がみられるもの。

### 3類（第8、12図）

S I 4、5、14、15、20、23、26、27、34が該当する。

特徴：礫密度は中密度（S I 4・23）・低密度（S I 5、14・15・20・26・27・34）の二つに分かれ  
る。

S I 14の亜角礫は被熱し、破碎した砂岩が多い。S I 34は窪み状の範囲に集積したような状態である。  
炭化物ではなく、赤化した礫もないことから準備礫もしくは廃棄礫の可能性が考えられる。

### 2 遺物（第13図～17図）

集石遺構の埋土中、II層より縄文時代晚期、IV層～V層中より縄文時代早期と思われる土器片が出土  
した。以下その概要を述べる。

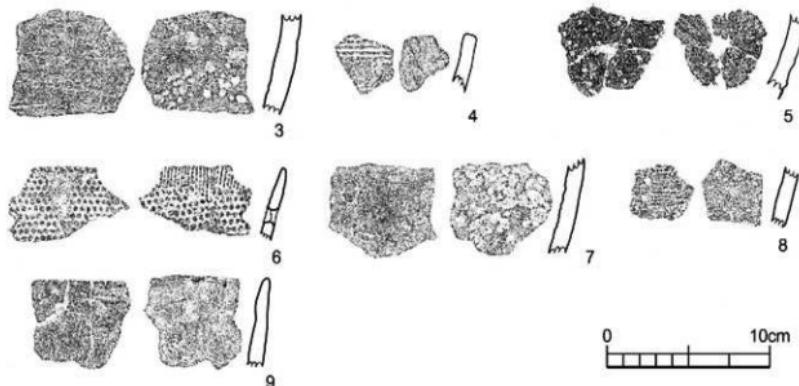
#### ①集石遺構出土の遺物（第13図）

S I 2、21からは無文土器（3、7）、S I 13、27、31からは貝殻文系土器（4、5、9）、S I 20  
からは梢円押型文土器が出土している。4・9の貝殻文系土器は、外面の口唇部に貝殻条痕文を横位に  
施文している。5は貝殻による刺突文を連続して列点状に施している。

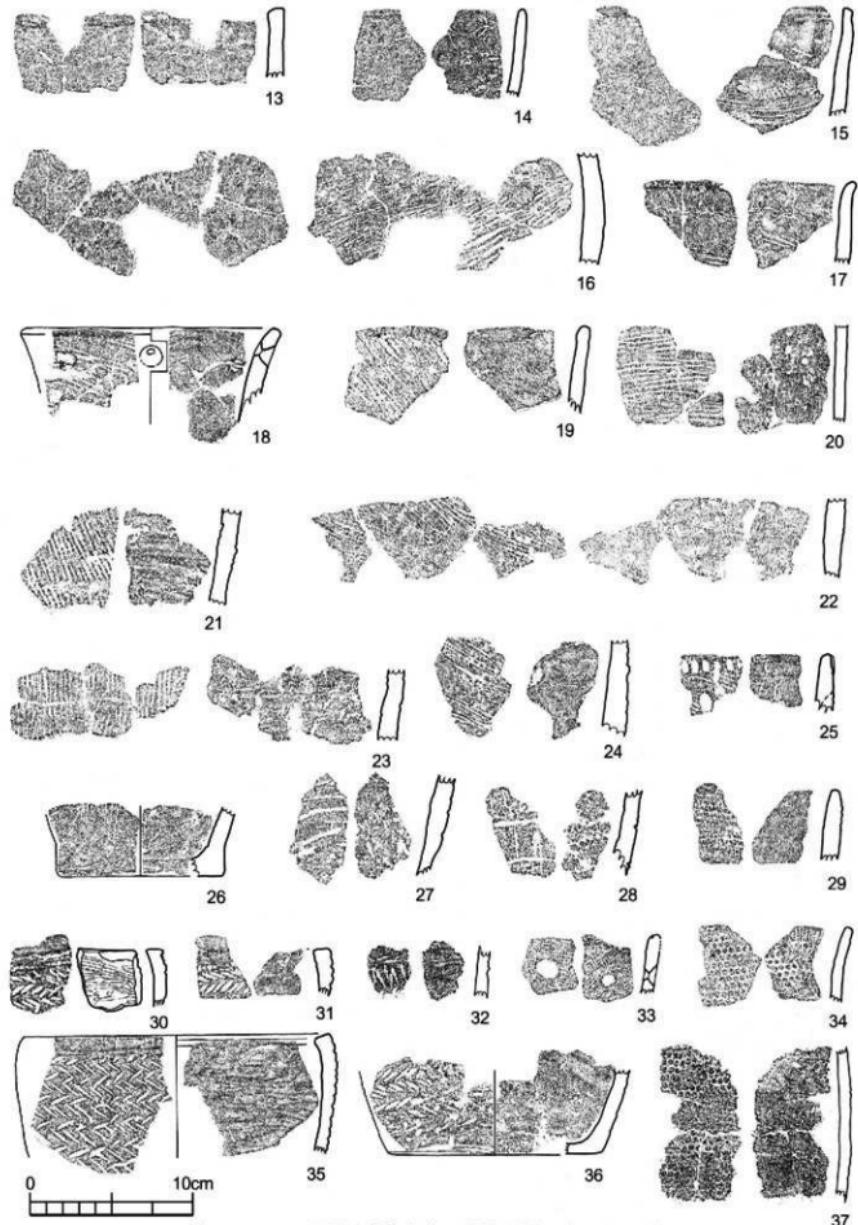
石器はS I 20よりチャート剥片（図版5-10）、S I 7、13、16（図版5-11、12）、20、31よりチ  
ャートの碎片、S I 11より黒曜石碎片が出土している。

#### ②II・IV・V層出土の縄文土器（第14・15図、第3表）

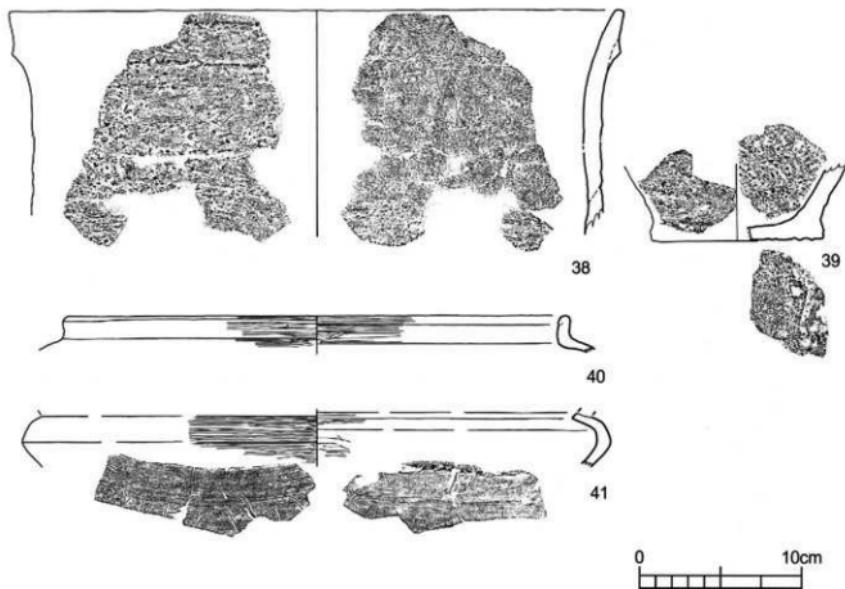
いずれも小片で器形による分類が不可能なため、土器の内外面に施された文様を基準に5類に細分し  
た。IV・V層出土遺物の出土分布とその標高は第18図のとおりである。その分布はまばらで、まとまり  
はみられない。出土位置の標高も、南西にゆるやかに下っていく地形に沿って出土しており、同一包含  
層の遺物であると考えられる。



第13図 集石遺構出土遺物実測図 (S = 1 : 3)



第14図 IV・V層出土遺物実測図（縄文土器）（S=1:3）



第15図 II層出土遺物実測図（縄文土器）（S = 1 : 3）

### 1 無文土器（第14図13～17）

口唇部の形態は平坦なもの（13、15）と丸く仕上げられたもの（14）と2種類みられる。いずれも直口円筒形の器形と考えられる。14は胎土に纖維が混入している。16は外面はナデ調整を、内面は貝殻腹縁による斜位のケズリ状調整を行っている。貝殻条痕文土器の範疇に入るのかもしれないが、条痕が内面しか施されていないため無文土器の範疇に加えた。

### 2 貝殻文系土器（第14図17～26、29）

※貝殻条痕文土器・貝殻腹縁刺突文土器が出土している。

**貝殻条痕文土器（17～26）** 施文方向は横位、斜位、縦位に分かれる。口縁部は、わずかに外反するもの（17、18）と直口するもの（19、25）がある。いずれも口唇部は丸く仕上げられている。24は他の条痕文と異なり、一単位が2条でその幅は狭い。貝殻条痕文ではない可能性もある。25は口縁部外面に連続刺突文を施す、いわゆる前平式土器である。口縁部下に1か所穿孔が見られる。

**貝殻腹縁刺突文土器（29）** 29は外面に横位の貝殻腹縁刺突文を施しており、中原式土器のII類、もしくは政所式土器といわれるものに相当する。

### 3 その他工具による施文を施した土器（第14図27、28、30～34）

27、28、34はヘラ状工具を用いて沈線を施している。27は沈線を組み合わせ、格子状の文様を形成している。

30～33はヘラ描きによる綾杉文を施文する土器である。口縁部が胴部に比べ肥厚化しており、口唇部は平坦に成形されている。内面は丁寧なミガキ調整が行われており、精緻な土器である。口縁上部に貝殻腹縁による刺突文を施す、宮崎県清武町辻遺跡で出土したいわゆる辻タイプの範疇に入ると思われる。

### 4 押型文土器（第14図35～37）

35は口縁がわずかに内湾する器形である。内外面ともに細かい山形文を施されており、口唇部には直径1ミリ程度の刺突文が不規則に施されている。また、口縁部より約2cm下に穿孔が内外両面から穿たれている。36は器壁が他の土器に比べ薄く、口縁がやや外反する器形である。胎土に角閃石を多く含む。外面に橢円形文、内面上部には原体条痕、その下に橢円形文を施している。下菅生B式土器に相当する。37は36と同様器壁は薄い。橢円押型文を帶状に施している。内面は丁寧なナデである。

### 5 II層出土の縄文土器（第15図38～41）

アカホヤ火山灰層（Ⅲ層）より上層であるII層出土の土器で、時期は縄文時代晩期に相当すると考えられる。38は外反する口縁をもち、口縁部のやや下に断面三角形の貼付突帯を巡らせている。外面は口縁部に横ナデを施し、突帯より下は風化のため不明瞭である。39は深鉢の底部である。

底部がやや外に張り出す器形である。40、41は内外面に丁寧なミガキを施し、肩部が張る黒川式土器の浅鉢である。41は口縁部を欠損しているが、接合痕の位置などから、屈曲し外反する短い口縁部が貼り付けられた浅鉢だと思われる。

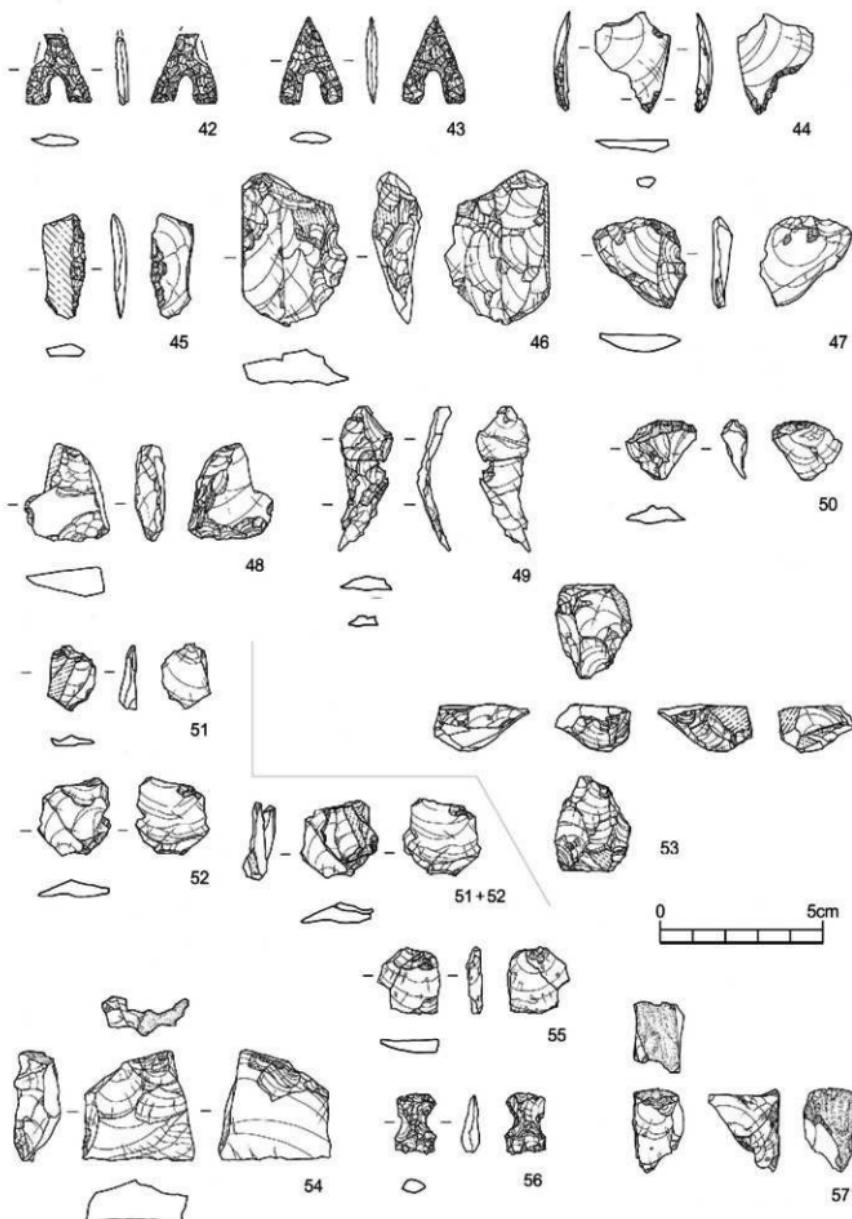
### ③ 石器（第16・17図、第4表）

IV・V層より出土した縄文時代と考えられる石器数は約200点とさほど多くはないが、石鏸、削器、石錐、磨石、敲石、石核、打製石斧等の器種が偏りなく一通り出土している。石材はチャート・黒曜石・ホルンフェルス・サヌカイト・砂岩・尾鈴酸性岩等がみられるが、約5cm以下の削器や二次加工剥片、石鏸などにはチャートや黒曜石を用いているが、それ以上大きな石器に関してはホルンフェルスや砂岩、尾鈴酸性岩を使用する傾向がある。以下、出土遺物の説明をおこなう。

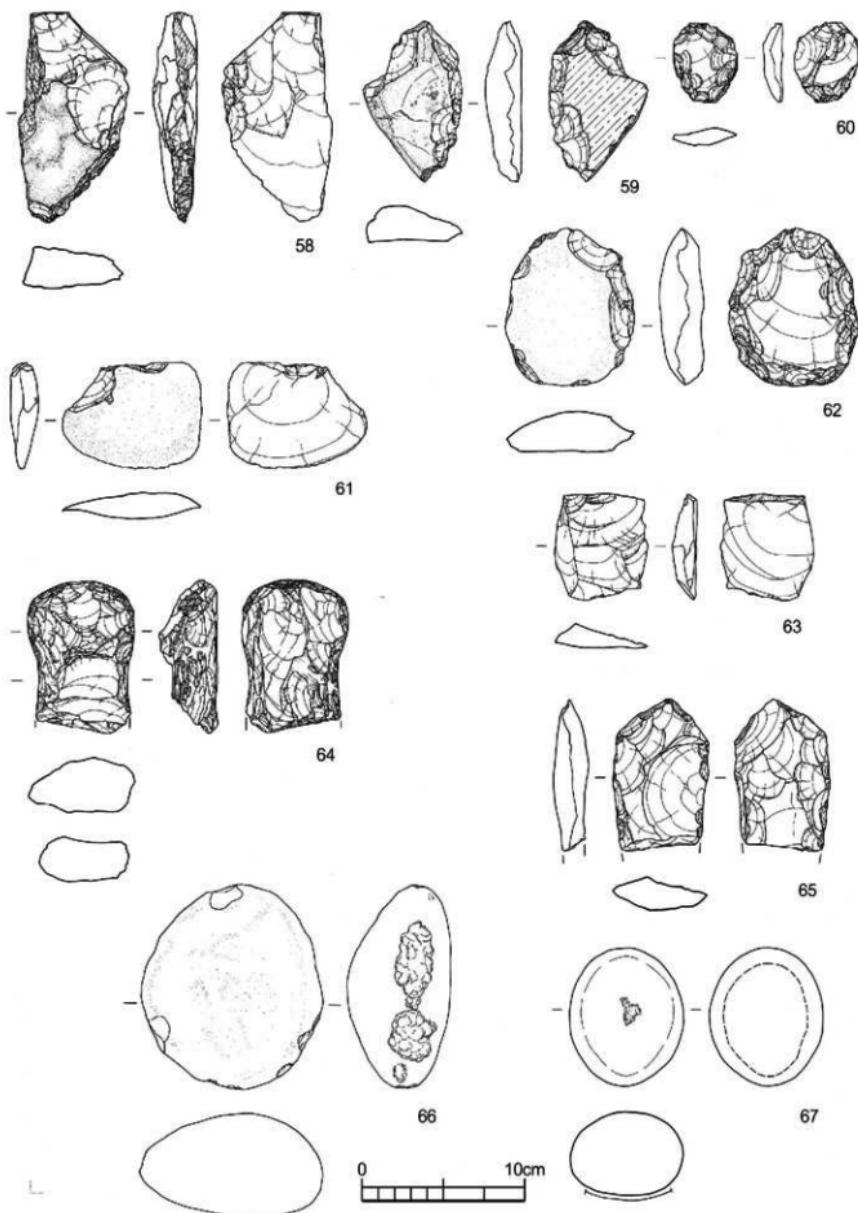
第16図42、43の石鏸は凹基無茎鏸である。基部の抉り込みは比較的深い。2点ともチャート製である。45は削器で、幅広な面の表裏両面に調整を行っている。一部欠損している可能性がある。48は二次加工剥片である。下部表裏両面に連続した調整を行っている。51・52は接合資料である。49～52、55は剥片である。56は異形石器である。石材は黒曜石で、中央にくびれを作り出したリボンの様な形をしている。第17図61、63は剥片である。64、65は撥形の打製石斧である。石材はホルンフェルスで、2点とも基部を欠損している。64は中央部に弱いくびれを持つ。

第3表 繩文土器 遺物観察表

番号	出土層 遺構	器種 器形	部 位	胎 土	色 調		考 察
					内 面	外 面	
3	S I 2	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色-淡青灰色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0) 赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、厚手であり、外層はナメ陶器を作っている。内面は黒化のため斜面は不明。
4	S I 13	深鉢	口縁部	1-4cm下部底面-表面-淡青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は口縁部附近に其筋密度を高す。内面はナメを調査を行っている。丁と同タイプか。
5	S I 13	深鉢	肩部	1-4cm下部底面-表面-淡青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	にこい(7.5YR4/0)	縄文土器、外層に濃縮した表面光沢を有す。内面は黒化のため斜面は不明。上と同タイプか。
6	S I 20	深鉢	口縁部	1-3cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色合む	にこい(7.5YR4/0)	にこい(7.5YR4/0)	縄文土器、厚手の器で、壁は内側から多く剥げて内面に露出部形成、内面上部には骨筋痕跡、その下に骨内形文を有している。下生土は土色と異れる。
7	S I 21	深鉢	肩部	1-4cm下部底面-表面-淡青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0) にこい(7.5YR4/0)	縄文土器、厚手であり、外層は焼ナメ陶器を作っている。内面は黒化のため斜面は不明。
8	S I 27	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0) 赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、内輪側で、内側部と共に黒化しておけ野原は不明だが、外層は只頭部以下がうつら焼錆できる。
9	S I 31	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、口縁部は黒化するが、外層は焼錆付近に其筋密度を高す。内面はナメを調査を行っている。
13	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、口縁部は黒化するが、口内側形文の器群、内面土ともに丁寧なナメ陶器である。
14	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、厚手に燒ナメ陶器、口縫部はえぐり剥離している。口内側形文の器群、内面土ともに丁寧なナメ陶器である。
15	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、口縁部は黒化するが、外層は焼錆付近で、内面は黒化のため不規則だが、内面はナメ陶器である。
16	IV	深鉢	肩部	1-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層はナメ陶器と、内面は黒化するが、内面は黒化のため不規則である。
17	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、内輪側と内側部の表面黒化を有する。内面は黒化のため不規則である。
18	V	深鉢	口縁部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層に内側部と同様の黒化を有す。内面は丁寧なナメ陶器を行っている。また、口縁部下に内側部からなる。表面は焼錆付近で内面は丁寧なナメ陶器を行っている。
19	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は内側部と同様の黒化を有す。内面は丁寧なナメ陶器を行っている。
20	IV	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は内側部と同様の黒化を有す。内面は丁寧なナメ陶器を行っている。
21	IV	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は黒化して、内面はナメ陶器。
22	IV	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-淡青灰色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は内側部と同様の黒化を有す。内面はナメ陶器を作っている。
23	IV	深鉢	肩部	胎土-2-3cm-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は内側部と同様の黒化を有す。内面はナメ陶器を作っている。
24	V	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、内輪側と内側部の表面黒化を有する。内面はナメ陶器である。
25	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器、外層は内側部と同様の黒化を有す。内面はナメ陶器を作っている。
26	IV	深鉢	底部	3-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	外層は経年劣化の跡がある。内面はナメ陶器。
27	IV	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	工具による擦跡を残す土器。外層はヘラ式工具で洗削し斜面に不規則に削り、内面はナメ陶器をおこなう。
28	IV	深鉢	肩部	1-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	工具による擦跡を残す土器。色や形状などの特徴は縄文土器と同様、外層は世紀末から十八九世纪までヘラ式工具で洗削を引き、さらに斜面に擦跡を残す。精巧な文様を有する。内面はナメ陶器をおこなう。
29	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄文土器と同様の黒化を有する。内面はナメ陶器を作っている。内面はナメ陶器。
30	T A 3	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	ヘラによる擦跡を残す土器。二重口縁部付近に擦跡を有しており、外層は口縁部附近に擦跡を有する。内面は内側部と内側部付近に擦跡を有する。内面はナメ陶器。
31	IV	深鉢	口縁部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	ヘラによる擦跡を残す土器。口縁部附近に擦跡を有する。内面はナメ陶器。
32	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	ヘラによる擦跡を残す土器。内面はナメ陶器。
33	IV	深鉢	底部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	ヘラによる擦跡を残す土器。内面はナメ陶器。
34	IV	深鉢	肩部	1-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	にこい(7.5YR4/0)	ヘラによる擦跡を残す土器。内面はナメ陶器。
35	IV	深鉢	口縁部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄型土器。内面に擦跡を有する。内面はナメ陶器。
36	IV	深鉢	口縁部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄型土器。地に内側部を多く含む。内側部は黒化して、内面はナメ陶器。
37	IV	深鉢	肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	縄型土器。地に内側部を多く含む。内側部は黒化して、内面はナメ陶器。
38	II	深鉢	口縁-肩部	2-4cm下部底面-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	地の土器。外層に内側部と同様の黒化を有する。内面はナメ陶器。
39	II	深鉢	底部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	地の土器。内面に内側部と同様の黒化を有する。内面はナメ陶器。
40	II	浅鉢	口縁	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	にこい(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	地の土器。内面に内側部と同様の黒化を有する。内面はナメ陶器。
41	II	浅鉢	底部	胎土表面-赤褐色-表面-黑色-赤褐色-青灰色 赤褐色合む	赤褐色(7.5YR4/0)	赤褐色(7.5YR4/0)	地の土器。内面に内側部と同様の黒化を有する。内面はナメ陶器。

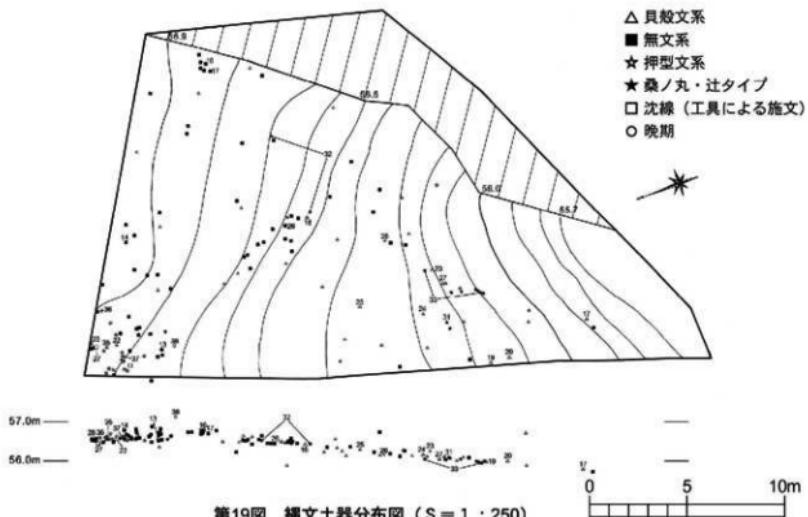
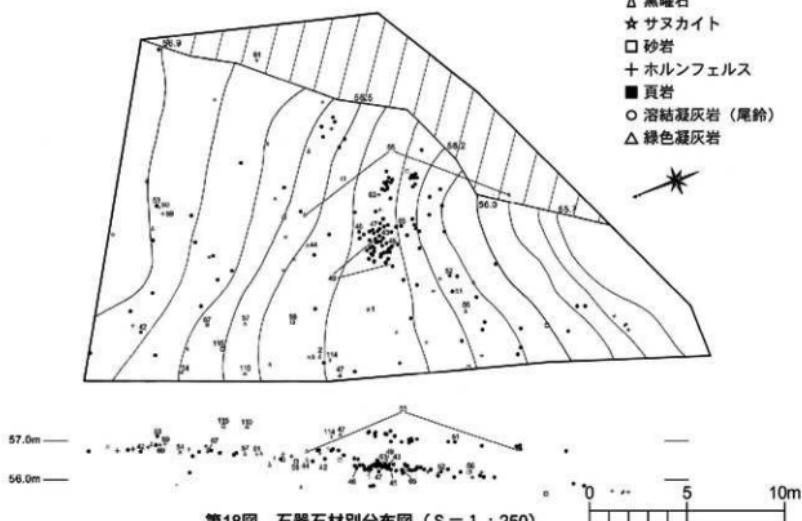


第16図 IV・V層出土遺物実測図（石器1）（S=2:3）



第17図 IV・V層出土遺物実測図（石器2）（S=1:3）

- チャート
- △ 黒曜石
- ★ サヌカイト
- 砂岩
- + ホルンフェルス
- 貝岩
- 溶結凝灰岩（尾鉤）
- △ 緑色凝灰岩



### 第3節 弥生時代の遺構と遺物

調査区南側はⅢ層まで削平されており、既にⅣ層が露出した状態だったため、調査区北側のⅡ層・Ⅲ層が堆積している範囲を調査対象とした。標高は調査区北側が57.2mで、Ⅲ層検出範囲の南端は標高56.6mと高低差は0.6mであり、緩やかに南に向かって下っていく地形である。

表土を除去した後、弥生時代の遺物包含層であるⅡ層を人力で掘り下げ、Ⅱ層上面で精査を行い遺構検出を試みたところ、方形状の黒褐色の埋土が何か所が確認された（第20図）。土器等の遺物もその黒褐色の埋土内に集中しており、特に完形に近い甕（第23図-68、69）が直立した状態で埋まっている状況で出土した点から、この黒褐色埋土は住居跡等遺構の可能性が考えられた。しかし、樹根による搅乱のため、壁面の立ち上がり・床面等、遺構の存在を確認できるものが検出できなかったため、その範囲を報告するのみに留める。確実な弥生時代の遺構は配石遺構1基と土塙1基である。以下説明する。

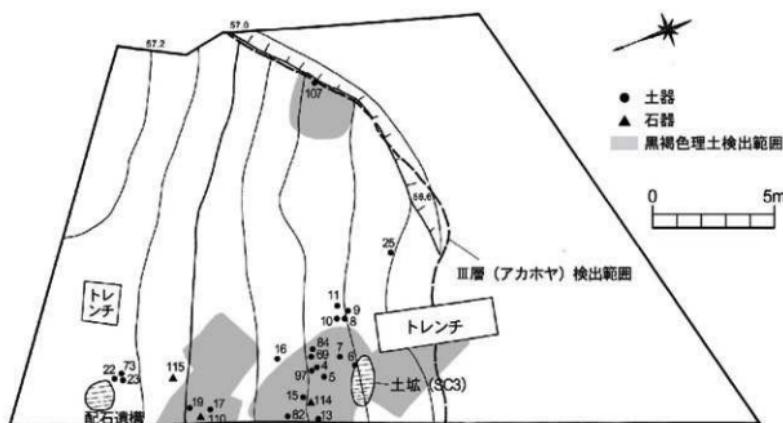
#### 1 遺構

##### 1) 配石遺構（第21図）

調査区北西側より検出された。直径80cm程度の配石遺構である。Ⅲ層上面より出土した。5cmほどⅢ層上面に盛土をし、そこに長さ20cmの扁平な石を渦巻き状に並べている。石の大半は焼けており赤化している。遺物もなく、用途は不明である。

##### 2) 土塙（S C 3）（第22図）

調査区西側より検出された。長軸2.3m、短軸1.0mの土塙である。深さは0.2mと浅い。東側の土塙壁に扁平な河原石を1枚、西側に2枚の河原石を直立させ設置している。土塙の立ち上がりはその大半が削平されており確認できなかった。埋土からは弥生土器小片、石鏃1点（第25図-109）が出土した。



第20図 弥生時代遺構・遺物分布図 ( $S = 1 : 200$ )

## 2 遺物（第23～25図）

第II層中もしくは弥生時代遺構検出面より出土した遺物の説明を行う。遺物1点ごとの詳細については第4・5表を参照していただきたい。

### 1) 弥生土器（第23、24図）

壺 破片資料が多いため、各部位別に形状を述べる。（第23図68～79）

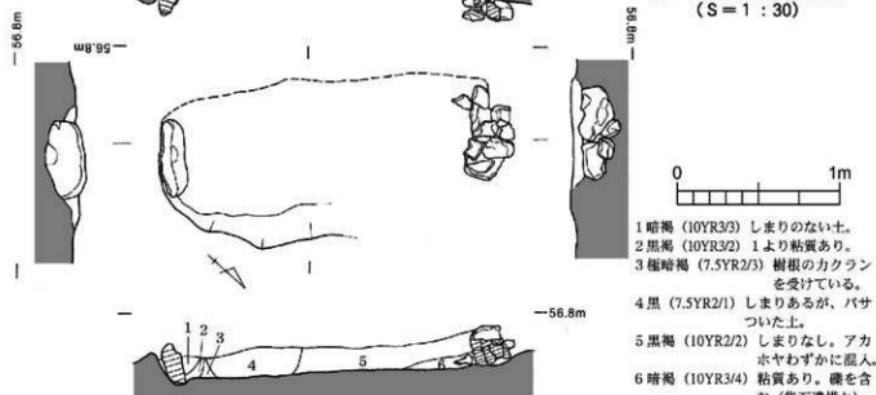
口唇部は中央が凹むもの（68、69）、平面状（70）、丸みがあるもの（71、72）に分けられる。口縁の立ち上がりは、ゆるやかなくの字を呈するものが大半を占める。底部はいずれもわずかに平坦面を残す尖底に近い平底だが、その平坦面の直径が2cmを超えるもの（68、76～79）と2cm以下のもの（69）に分けることができる。この直径で分けた根拠は、2cmを境に底部の作り方が若干変化するように感じたためである。直径2cm以上の底部は、底部の水平部分が接地面に水平になるように作られているが、2cm以下の底部は、水平部分が必ずしも接地面に水平にならない。

以上のことから直径2cm以下の底部のほうがより尖底に近いと思われる。68は外面口縁部から胴部下半にかけてスグが付着しているが、底部より7cmの箇所からはスグが全く付着していない。煮炊きの際付着したものと考えると、地面もしくは焚き火に底部を突き刺して使用した可能性も考えられる。

壺 壺と同様に破片資料が多いが、その口縁部形態より細別できる。

（第23図80～90、第24図91～95）

80～82は直口壺である。その口唇部形状・立ち上がりから更に細分が可能であるが、ここでは言及しない。口縁部の長いタイプである。



第22図 S C 3 実測図 (S = 1 : 30)

83は長頸壺である。84は短頸壺で、最大径は胴部中央である。89、90は底部のみだが84と同様に底部直径が2cmを超えており、同タイプの底部と思われる。91~95は複合口縁壺である。波状文を施すもの（91~94）と鋸歯文を施すもの（95）の2種類ある。92は断面より二重口縁部分の縦目に内側から粘土を足し、二重口縁部を補強している様子が窺える。

### 鉢 二点ともほぼ完形で出土した。（第24図96、97）

96は口唇部は先細りする形状で、若干内湾する器形である。調整は内外面ともに口縁部はヨコナデ、底部付近は斜めにナデたのち、底部を指で凹ませている。粘土縫目痕が口縁部付近に明瞭に残っていることから口縁部付近は粘土を付け足して成形したと思われる。

97は口唇部は平面状で口縁部は短く、くの字に外反する。口縁部外面ともにヨコナデである。内面は頸部より下はケズリ状のナデを行う。外面は頸部より下は、ケズリ状の工具ナデを施す。頸部に工具痕がみられる。底部は乳頭状を成す底部である。

### 高杯 壴部の破片資料が大半である。（第24図98~107）

98の壴部は壴部と口縁部の境に明瞭な稜線を持ち、口縁が外反するタイプである。99~101は脚部で、円塊充填法により壴部・脚部の接合を行うタイプである。

壴部は大きく広がるもの（105）、傘状に広がるもの（106）、エンタシス状の脚柱部をもつ高杯の脚部と思われるもの（107）などがみられる。

### 杓子状土器（第24図108）

柄部分のみの出土である。粘土を円筒状に丸め、手捏ねによる成形を行っている。

本遺跡出土の弥生土器の時期については、底部形態が尖底に近いことや、二重口縁壺の存在等から尾花坂上遺跡出土の弥生土器は後期後半~終末期に相当すると思われる。

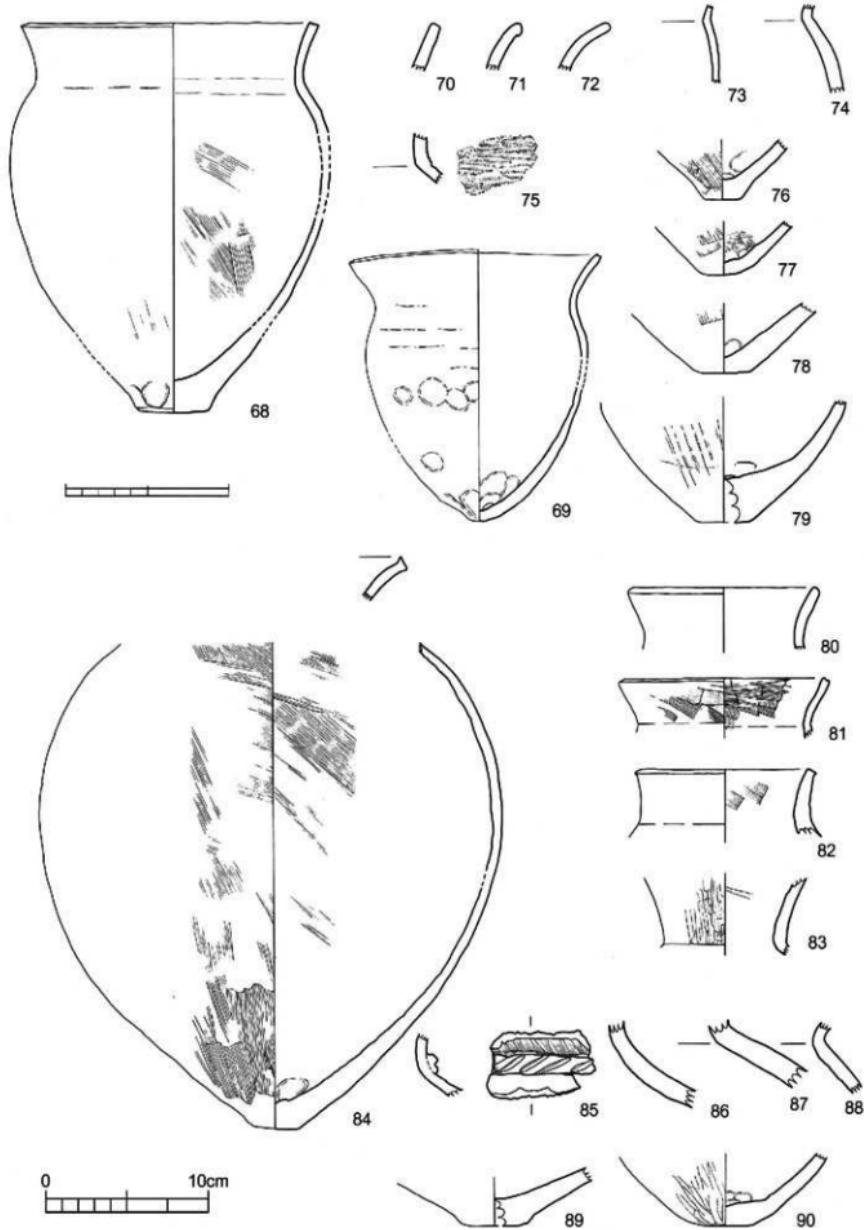
### 2) 石器（第25図、第4表）

II層出土の石器は、石鏃、石錐、打製石斧、台石等が出土している。

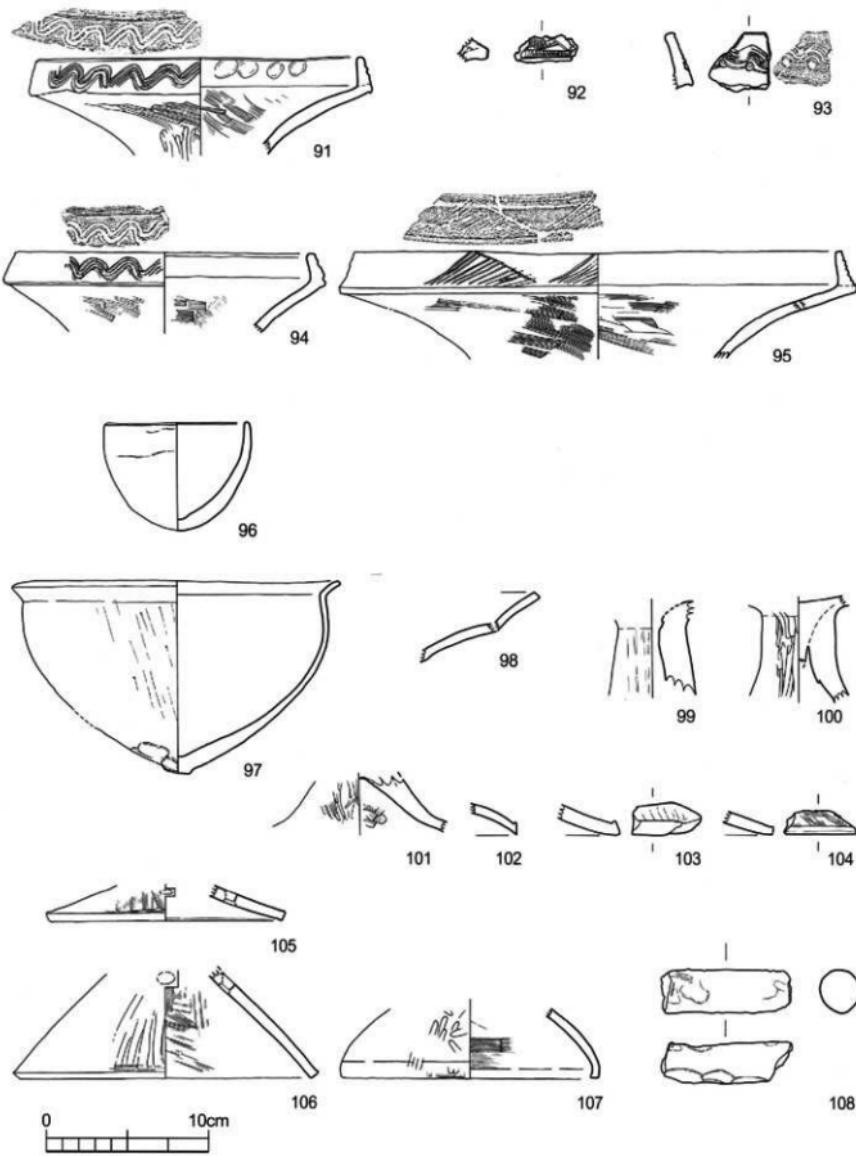
109、110は凹基式鏃である。109は抉り部が直線的に仕上げられ、三角形を呈する打製石鏃である。SC3の埋土中より出土した。石材はサヌカイトである。110は磨製石鏃である。抉り部がわずかに内湾し、弧状を呈す。114の打製石斧はIV層出土の打製石斧（64）と同じく石材はホルンフェルスである。

番号	社名-場所	種類	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	SD20	剥片	チャート	2.2	3.0	0.4	3.3
11	SH13	剥片	チャート	2.0	1.3	0.5	1.2
12	SH16	剥片	チャート	1.3	0.8	0.2	0.8
42	IV	石錐	チャート	215	1.8	0.36	1.1
43	IV	石錐	チャート	2.8	1.9	0.6	1.0
44	IV	ドリル(鑿)	鷹島-馬鹿岩	3.05	2.3	0.35	2.0
45	IV	スクレーパー	チャート	3.2	1.3	0.37	1.7
46	SD1-V	二重口縁壺	チャート	4.7	3.2	1.2	20
47	II	二重口縁壺	チャート	2.8	2.85	0.65	4.8
48	II	二重口縁壺	チャート	2.95	2.4	0.9	6.5
49	IV	剥片	チャート	4.42	1.85	1.0	2.3
50	IV	剥片	チャート	1.8	2.3	0.8	1.8
51	IV	剥片	チャート	1.85	1.48	0.32	1.0
52	IV	剥片	チャート	2.35	2.2	0.7	2.4
53	IV	石錐	チャート	2.8	2.3	1.45	5.6
54	IV	石錐	サヌカイト	3.25	3.4	1.4	13.3
55	IV	剥片	高嶺石	2.05	1.9	0.5	1.6
56	IV	高嶺石	高嶺石	1.8	1.2	0.52	0.8
57	IV	石錐	高嶺石	2.5	1.55	2.15	7.8
58	IV	スクレーパー	砂岩	12.87	6.78	2.72	248.7
59	IV	スクレーパー	ホルンフェルス	9.8	6.1	2.2	137
60	IV	スクレーパー	ホルンフェルス	4.85	3.95	1.2	22.1
61	IV	剥片	ホルンフェルス	6.5	8.8	17.5	110
62	IV	磨錐	ホルンフェルス	9.7	8	2.40	262.5
63	IV	剥片	ホルンフェルス	6.5	5.7	1.5	48.7
64	IV	打製石斧	ホルンフェルス	9.4	9.8	4.6	285.3
65	IV	打製石斧	高嶺石	9.3	5.85	2.1	124
66	IV	石錐	砂岩	19.2	19.1	6.2	331.9
67	IV	磨石	滑石(蛇紋岩(火成岩))	6.49	7.02	5.13	498.2
109	SD1	石錐	サヌカイト	2.85	1.95	0.35	1.3
110	II	磨製石錐	緑色泥灰岩	3.4	2.2	2.5	2.7
111	II	磨製石錐	白雲母	2.9	1.95	0.2	1.2
112	II	石錐	砂岩	7.45	5.5	1.25	76.4
113	II	石錐	砂岩	4.7	4.7	1.0	47.8
114	II	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	6	1.6	192
115	II	石錐	砂岩	27.43	17.3	6.5	4000

第4表 II・IV層出土石器計測表



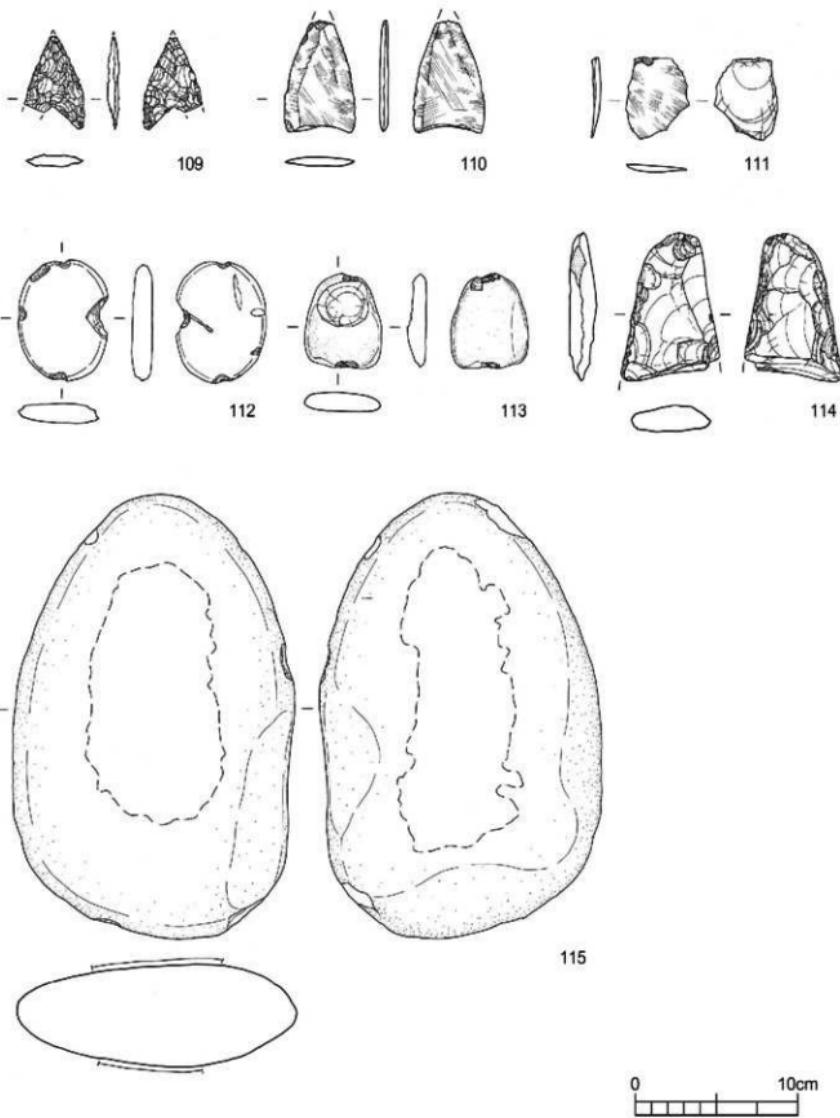
第23図 II層出土遺物実測図（弥生土器1）（S=1:3）



第24図 II層出土遺物実測図（弥生土器2）（S=1:3）

第5表 弥生土器 遺物観察表

番号	出土層 遺構	部 位	胎 土	色 調		法 量(cm)	考 察
				内 面	外 面		
内 面	外 面	口 径	器 高	底 厚			
66	II	口縁～底部	二重・三重・四重の合板状の 胎土を用いたもの	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	(16.3) (24.0) (4.3)	中空部の内部は白色、外壁は上りがりやすいもの。最大直径約24cm、底面はセメント接着で奥にヒリ付けてある。内面は胎土を用いたもの。外壁はセメント接着で奥にヒリ付けてある。内面は胎土を用いたもの。外壁はセメント接着で奥にヒリ付けてある。
69	II	口縁～底部	二重・三重の合板状の 胎土を用いたもの	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	(15.5) (16.7) (4.05)	中空部の内部は白色、外壁は上りがりやすいもの。最大直径約16.7cm、底面はセメント接着で奥にヒリ付けてある。内面は胎土を用いたもの。外壁はセメント接着で奥にヒリ付けてある。
70	II	口縁部	石	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)		中空部の内部は白色、外壁は上りがりやすいもの。最大直径約15.5cm、底面はセメント接着で奥にヒリ付けてある。内面は胎土を用いたもの。外壁はセメント接着で奥にヒリ付けてある。
71	II	口縁部	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)			中空部の内部は白色、外壁は上りがりやすいもの。底面はセメント接着で奥にヒリ付けてある。
72	II	口縁部	Amber黄褐色～白色・淡白色の組合 せり	黃色(10YR5/2)	黃色(10YR5/2)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
73	II	腹部～ 底部	Imai T. 黄褐色・灰色・淡白色の組合 せり	灰白(10YR5/1) オーブン焼成(3931)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
74	II	腹部～ 底部	Amber T. 黄褐色の組合・赤褐色 の組合	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
75	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色・淡青色 の組合	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
76	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色・淡青色 の組合・Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1) 灰白(10YR5/1)	(22.5)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
77	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色・淡青色 の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(23.5)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
78	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(34)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
79	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合 とAmber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(29)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
80	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	112 38	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
81	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色・灰色の組合 とAmber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	122 36	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
82	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色・淡白色・淡青色 の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	103	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
83	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色・淡青色 の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
84	II	口縁部	Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	300 29	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
85	II	腹部～ 底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
86	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
87	II	底部	Amber T. 黄褐色・Amber T. 黄褐色 の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
88	II	腹部	Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
89	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(41)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
90	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡青色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
91	II	底部	Amber T. 黄褐色・Amber T. 黄褐色 の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	200 60	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
92	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
93	II	口縁部	Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
94	II	口縁部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	177 50	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
95	II	口縁 (底盤)	Amber T. 黄褐色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	300	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
96	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(8.6) (6.7) (1.5)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
97	II	口縁～ 底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(20.2) (11.9) (1.6)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
98	II	杯形	胎土を用いたもの	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		内面と外ともにハックルの跡がある。
99	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
100	II	底部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
101	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
102	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
103	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
104	T A 3	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
105	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(14.2)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
106	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(16.8)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
107	II	腹部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)	(15.8)	中空部の内部は黄色で、外壁は上りがりやすいもの。内面は胎土を用いたもの。
108	II	柄部	Amber T. 黄褐色・淡白色の組合	灰白(10YR5/1)	灰白(10YR5/1)		ヨコギリナミニの跡がある。



第25図 II層出土遺物実測図（石器）（109～111 S = 2 : 3、112～115 S = 1 : 3）

## 第4節まとめ

最後に今回の調査で明らかになった点を述べてまとめとする。

### 集石造構の分布について（第26図）

検出した集石造構34基は調査区内で2つのグループに分かれる。その分布は散礫1・2の分布域と重なる。

散礫1と分布域が重なるのは北東側に位置する一群である。この一群は、大まかにIV層の検出範囲とも重なっている。さらにこの一群に1類（配石あり）の集石造構が集中している。散礫2の範囲と重なる調査区南西の一組は、V層上面で検出された集石造構である。この一群には1類は存在せず、2類もしくは3類のみで構成されている。このことが何を意味するのかは判然としないが、34基中9基と全体の約3割存在する1類が同じIV層面より検出され、同じ分布域に位置することからこれらの集石造構は同時期に使用された可能性が高いのではないかと思われる。

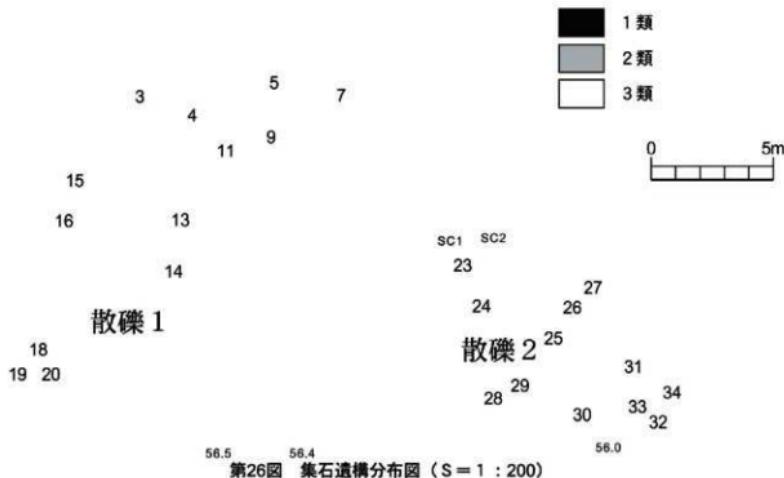
また、V層上面で検出された南西側の一組とも若干の時期差があるのではないかだろうか。

### 集石造構の種について（第2表、第27図）

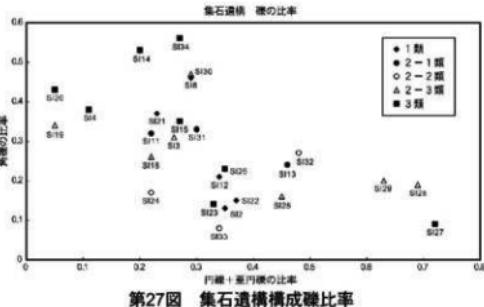
今回の調査では集石造構の種を白ヶ野第2・第3遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター第52集）で青山氏が行った種分類の基準を用いて分類した。まず、集石造構の用途は加熱調理施設であると仮定する。そして中の種は、集石に何程度か使用しそのたびに種が割れて小さくなり角礫化していくと仮定し、角種の比率から使用頻度の推定を行う為の分類である。

- 円種……円～椭円形のまま割れていない種（破碎していない種）
- 亜円種……円種が割れて二分した種（破碎種）
- 亜角種……亜円種がさらに二分した種（破碎が進んだ種）
- 角種……全体が角ばった種（破碎がさらに進み角種となった種）

第6表 構成礫の分類基準 ※白ヶ野第2・第3遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター第52集）より



対象としたのは切り合い等がみられない集石遺構26基である。また、白ヶ野第2・第3遺跡で集石を作つて調理実験した結果等から、1・2度使用した礫の割れる率は1割という結果が得られたため円礫と亜円礫の間に使用頻度の大きな差はないと考え、各集石遺構の円礫と亜円礫を合わせた数値と角礫の比率を集石遺構形態別で第27図に表した。図の右側にいくほど円礫と亜円



第27図 集石遺構成礫比率

礫の率が高く、いわゆる準備礫の可能性が高く、左上にいけば角礫の率が高く、廃棄礫の可能性が高くなる。データはその大半が円礫と亜円礫の比率が20%以上50%以下の箇所に集中した。この範囲が尾花坂上遺跡出土集石遺構の平均的な数値であると考えると、0~20%の範囲、60~80%の範囲に入る集石遺構6基が異質となる。前述の仮定に従えばS I 19、20、4は廃棄礫、S I 25、27、29は準備礫の可能性が考えられる。これらの集石遺構は2-3類、3類のいずれかに入る。このことから2-3類、3類の形態を呈す集石遺構が準備礫、廃棄礫である可能性が高いことになる。

#### 弥生時代の尾花坂上遺跡について（第20図）

出土遺物より尾花坂上遺跡は、後期後半～終末期頃に何らかの活動があった場所だと考えられる。本遺跡の周辺からは、現在調査中の湯牟田遺跡、尾花A遺跡等同時期の集落遺跡が調査されている。本遺跡の周辺隣接地は削平されており、遺跡内にも樹根による攪乱のため弥生時代面の解明は無理であったが、これら両遺跡の調査の進展により本遺跡の弥生時代の様相解明が一層進展することを期待する。

#### 参考文献

- 小矢部市教育委員会『桜町遺跡発掘調査報告書 純文遺構編 I』2004
- 栗畠光博『古文化談義』5「中溝式系土器の検討」九州古文化研究会2000
- 松永幸寿『西南國一九州間の交流に関する考古学的研究』「日向における古式土器の成立と展開」下條信行2004
- 高山町教育委員会・元興寺文化財研究所『水野原遺跡』2000
- 山中悦雄『宮崎県立総合博物館研究紀要 8』「宮崎県における弥生土器編年試案」宮崎県立総合博物館1983
- 石川悦雄『宮崎考古9』「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描(Mk.II)」宮崎考古学会1984
- 石川悦雄『宮崎県立総合博物館研究紀要15』「弥生時代後半期から古墳時代の土器編年に向けて－予察！高坏！」宮崎県立総合博物館1989
- 宮崎県教育委員会『下那珂貝塚』宮崎県立総合博物館1988
- 宮崎県埋蔵文化財センター 71集『阿蘇原上遺跡』86集『野首第1遺跡』89集『鷹原遺跡 第5地点』90集『東九州自動車道(都農～西都岡)関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV』91集『下那珂遺跡』2004
- 清武町教育委員会 清武町土地開発公社『辻遺跡』1980
- 大分県教育委員会『黒岩遺跡』2004
- 熊本県教育委員会『猪山・上の原遺跡』1996
- 九州縄文研究会・宮崎考古学会『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』2003
- 黒川忠弘『南九州貝殻文系土器II～宮崎・熊本・大分編』南九州縄文研究会2003
- 金丸武司『宮崎考古第19号』「宮崎における縄文時代早期前半の土器群～別府原式土器の設定～」宮崎考古学会2004

## 第IV章 自然科学分析の結果

### 宮崎県尾花板上い遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

#### I. 放射性炭素年代測定結果

##### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SI-21集石遺構、No. 2	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 2	SI-21集石遺構、No. 18	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)

##### 2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代(西暦) ( $1\sigma$ : 68%確率、 $2\sigma$ : 95%確率)
No. 1	194810	$8150 \pm 40$	-26.0	$8130 \pm 40$	交点: cal BC 7080 $1\sigma$ : cal BC 7140~7070 $2\sigma$ : cal BC 7190~7050
No. 2	194811	$8220 \pm 40$	-25.6	$8210 \pm 40$	交点: cal BC 7190 $1\sigma$ : cal BC 7310~7140 $2\sigma$ : cal BC 7340~7080

###### (1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD 1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

###### (2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

###### (3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

###### (4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を校正することにより算出した年代 (西暦)。

calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴのU-T h年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$  (68%確率)と $2\sigma$  (95%確率)は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma + 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

### 3. 所見

加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 の炭化材では $8130 \pm 40$ 年BP ( $2\sigma$ の暦年代でBC 7190~7050年)、No.2 の炭化物では $8210 \pm 40$ 年BP (同BC 7340~7080年) の年代値が得られた。

#### <文献>

Suiver et al. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, P1041~1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院 P1~36.

## II. 樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、S I 21集石遺構から採取された炭化材3点である。

### 3. 方法

試料を剖析して炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。



横断面 : 1.49mm  
No. 1 コナラ属コナラ節

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Pinus* ブナ科 図版1・2・3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

#### 5. 所見

分析の結果、S I 21集石遺構から採取された3点の炭化材は、いずれもコナラ属コナラ節と同定された。コナラ属コナラ節は、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、カシワ、コナラ、ナラガシ、ミズナラがあり、高さ15m、径60cmぐらいに達する。コナラ属コナラ節の種実（ドングリ）は、食用として有用である。

#### <文献>

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文水堂出版 P49～100

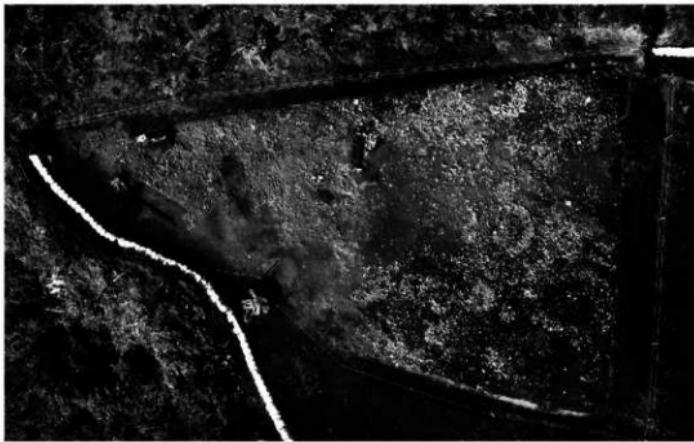
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣 P296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会 P242

# 図 版



遺跡遠景（小丸川方面）北側より撮影



縄文早期 散跡検出状況



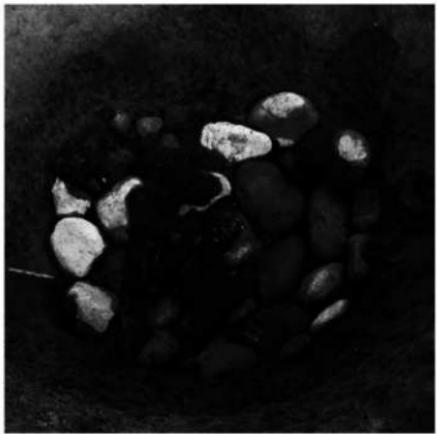
S I 12 半武状況（南より）



S I 13 検出状況（南より）



S I 21 配石検出状況



炭化材検出状況



S I 26・27・28 検出状況



S I 16・17 検出状況



S I 32・33・34 検出状況



S I 8 配石検出状況



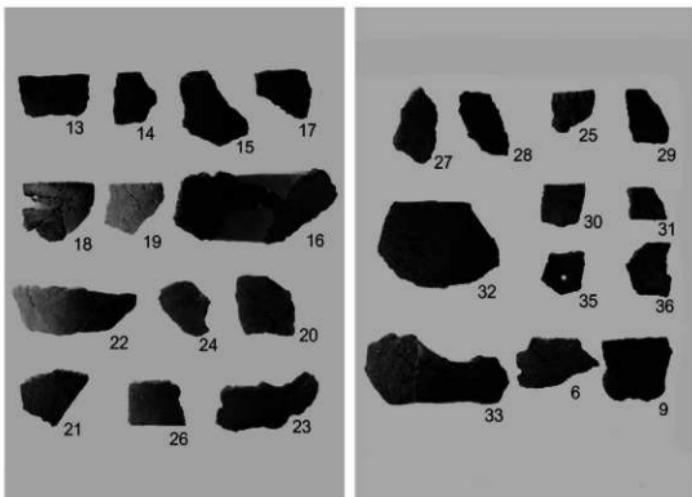
S I 22 花弁配石検出状況



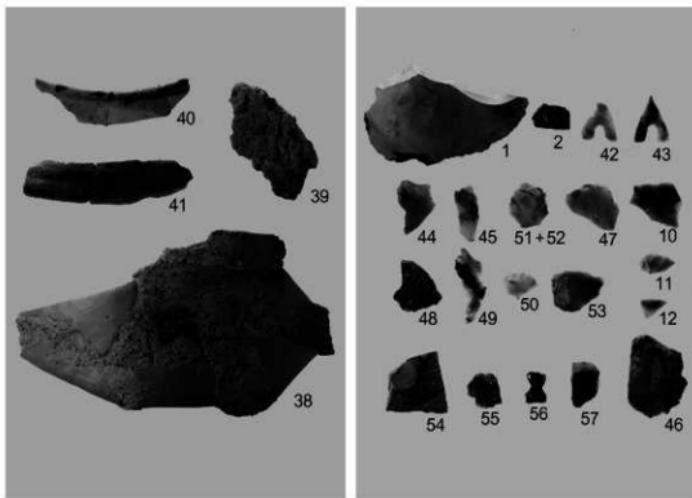
III層上面 配石構造検出状況



S I 3 検出状況

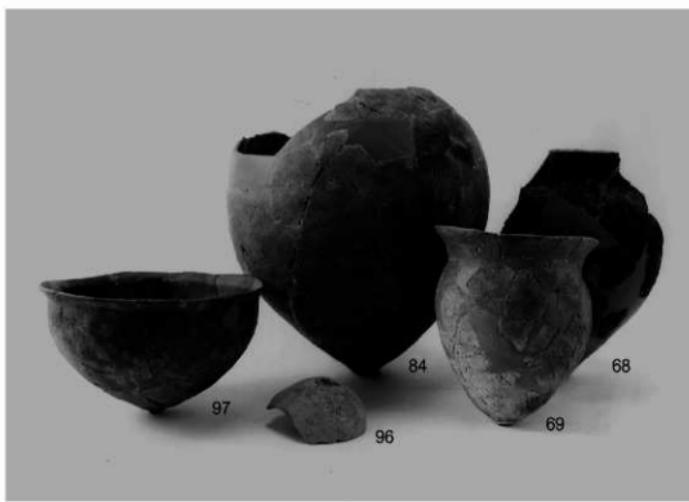
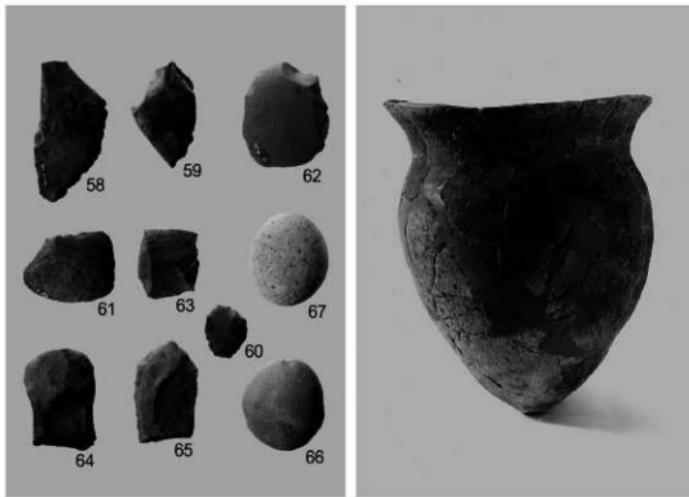


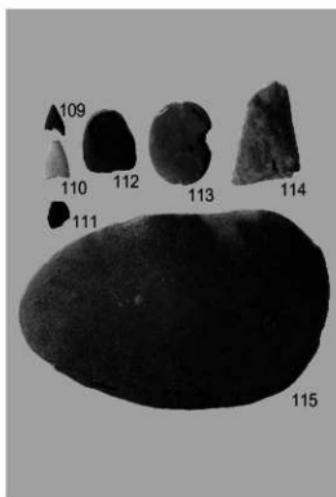
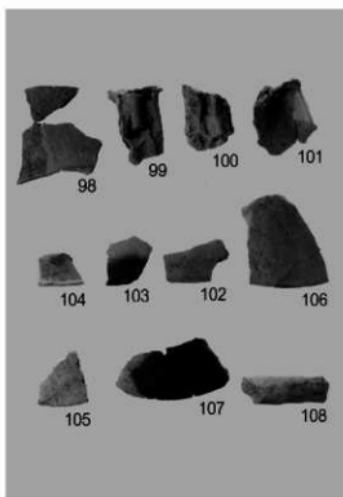
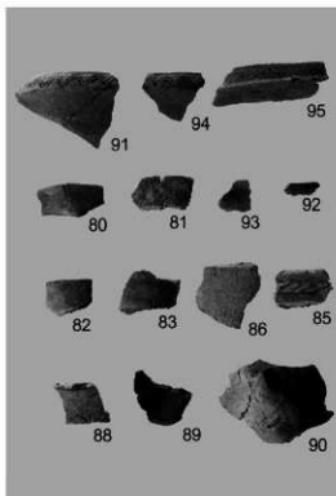
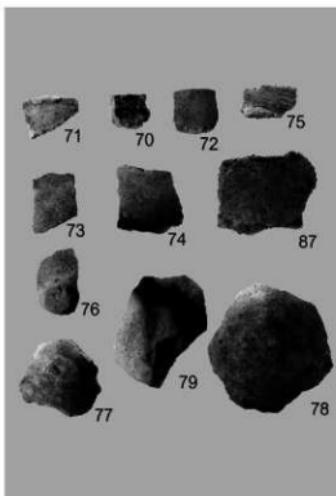
縄文土器（無文・貝殻条痕文系）

縄文土器  
(貝殻文系・押型文系・ヘラ状工具施文)

縄文土器 (晩期)

旧石器・縄文時代石器





宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第101集

## 尾花坂上遺跡

一般国道高鍋美々津郷地方道路交付金事業（鬼ヶ久保工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2005年2月7日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大学下郷4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(76)0660

印 刷 安藤印刷有限会社

〒880-0803 宮崎市旭2丁目4番4号  
TEL 0985(25)3394 FAX 0985(20)7198